Seven Fighters

corplash

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｅｖｅｎ　Ｆｉｇｈｔｅｒｓ

【Ｎコード】
Ｎ７５８３Ｘ

【作者名】
ｃｏｒｐｌａｓｈ

【あらすじ】
七賢人――。それは、この桜ヶ丘の中枢部を形作る隠れた者たち。
眠れる二頭獅子、ファイバースパイ、惑いの青蝶、企業の統率者、汚物の清掃人、そして、黄眼の忍び屋。
この七賢人たちが起こしたとされる伝説の一夜は、いまだに忘れられることはないだろう。そう、あの土曜日の夜の祭りのことは――。

原作とは全く設定が違います。キャラ崩壊などに抵抗のある方は、バックすることをおすすめします。

#1　「その者たち、何者」

とある日曜日。彼女たちは桜ヶ丘の外れにある、とある大きな屋敷に足を運んだ。風格のある作りと、純和風の引き戸。そこをくぐると、めいっぱいの舎弟たちが声を上げる。

「お帰りなさいやし！　お嬢！！」

「うん、ただいま」

そう言って引き戸をくぐるのは、桜ヶ丘女子高等学校3年、軽音楽部所属の平沢　唯。

「憂は帰ってきてる？」

「へぃ！　憂お嬢は5分ほど前に帰宅され、今は買出しに」

「そう、分かった」

「それより、お嬢」

「ん？」

「先程、親っさんが呼んでましたぜ」

「おじいちゃんが？」

「へぇ…。親っさんいわく、話があるとか……」

「そう…。私、着替えるね」

「へぃ！　失礼しやした！」

外に出たのを確認して、私は黒地に花柄をまとった和服に着替えた。そしておじいちゃんの待つ和室へ。

「おじいちゃん…」

「おぉ、唯か。入りなさい」

「失礼します」

引き戸を引いて中に入ると、紺色の浴衣を着てあぐらをかいているおじいちゃんと目が合う。そう、私のおじいちゃんの職業は……

極道なのです。

そして私は、おじいちゃん率いる平沢組の末子。そして憂も末子。
「タカから聞いたか…？」
「いえ、ただ話があると…」
「うむ、そうか…」
「はい。で、その話というのは…？」
「うむ…。唯は、山中組を知っとるか？」
「あぁ、祭りの後から妙に動かなくなった……」
「うむ。その山中組が、ついに再始動を始めたらしい」
「はぁ…」
「山中組は、わしら平沢組とは唯一敵対する族じゃ。外回りの時には、十分気をつけよ」
「はい」
「お、そうそう。この件、憂にも伝えておいてくれ」
「御意」
そう言うと、私はおじいちゃんのいる間から足を退けた。もうそろそろ、憂が帰ってきているのではないだろうか。私はおじいちゃんの御座から退いたあと、自室に戻る途中にある台所を覗いた。
「あ、お姉ちゃん帰ってたの？　おかえり」
「うん。ただいま」
ほらね。
「あ、そうそう。おじいちゃんがね…」

◇―◇―◇

私が家に帰って一番最初にすることと言えば、ノートパソコンを起動させることだ。
Ａ．Ｍ．　Ｉｎｆｏｒｍａｔｉｏｎ　Ｃｅｎｔｅｒ
そう表示されているページから、パスワードを入力して、管理人ペ

ージに飛ぶ。
Ａ．Ｍ．　Ｉｎｆｏｒｍａｔｉｏｎ　Ｃｅｎｔｅｒとは、私…もとい秋山　澪が開いている、情報交換サイトだ。
管理人である私は、Ａ．Ｍ．Ｉ．Ｃ．と略している。通称『アミック』。
　このサイトはユーザー制で、利用するには会員登録が必要だ。ユーザーそれぞれにアルファベットと数字を織り交ぜた５桁のパスワードが配布されていて、そのパスワードを用いてアミックを利用することができる。主な利用方法は、掲示板とチャット。ニュースで取り上げられている事柄から身の回りの小さな出来事まで様々だ。管理人である私の携帯電話には、掲示板の記事に更新情報があるたびにそれが通知されるシステムだ。最初は少なかった会員も、今となっては５０万を超すマンモスサイトだ。
「はぁ…。今日も興味のある記事はないなぁ…」
そうつぶやいて、私はパソコンの電源を落とした。

◇―◇―◇

「ただいまー」
「おかえりー、姉ちゃん」
「あ、悪い聡。ちょっと出かけてくるわ」
　私の名前は、田井中　律。桜ヶ丘女子高等学校に通う、軽音楽部所属のドラム担当。帰ってきたのはいいけれど、私はさっそくいかなければいけないところがある。
「今日もなのか？」
「あぁ。悪いけど飯頼むわ」
「分かった」
聡の返事を最後まで聞かず、私は自室に着替えに入った。
　白い生地に赤い刺繍で『恩那組』の文字。『おんなぐみ』と読む。これは私が着ている特攻服。そう。

私は恩那組の今季総長であり、初代総長であり、恩那組は関東を統一したはじめてのレディース。私は桜ヶ丘神社の境内に急いだ。

◆

「姐さん！」
「おう」
「姐さん、チッス！」
「おう」
私が挨拶したこの2人は、恩那組の幹部。いわば中核をなす2人だ。名は、今井（いまい）　薫（かおる）と藤崎（ふじさき）　楓（かえで）。私の忠実な部下だ。
「姉さん、今日の総会は？」
「あぁ。ある情報をつかんだんでな。そのことについてちょっと」
「ある情報？」
「あぁ。」
「私ら以外の七賢人（しちけんじん）についてだ」
「！！！」
2人ともハッとした顔つきをした。こいつらはいつ見ても飽きない。
「だから、総会での情報は内密に頼む」
「…はい」
「了解です…」
そう。私の組織するレディースは、ただの不良のあつまりではない。社会情勢も事細かに調べるスパイでもあるのだ。

◇―◇―◇

「そして我が社のプロデュースする製品は……」
私は琴吹　紬。桜ヶ丘女子高等学校に通う、女子高生。そして、世界の3／4を掌握する琴吹コーポレーションの社長令嬢。
私は今、会社が契約している子会社の新製品についての会議に出

席中。正直、つまらない。
（……この製品、当たらないわね。正直何言ってるかわからないし、用途が見当たらない…。捨て…ね）

ガタンッ

「！！」
「ど…どうされました？」
「我が社は、この製品を取り扱うことはできません」
「？！　…な、なぜ今更そのような」
「貴社の開発するその新製品には、メリットが見当たりませんわ。それに、その製品は既に我が社が開発したものの模倣品。今までの説明を聞く限りでは、まだ我が社の製品の方が優れていると思いますが」
「っ…しかし、我が社の製品は軽量化に成功しており……」
「その代償として性能が下がっているのでは？　性能がそのままに、軽量化に成功したなら我が社も考えましたが……。プラマイゼロなら、扱う必要はありませんわ。斉藤」
「はっ」
「お父様に連絡して。帰るわよ」
「御意」

◆

「ねぇ、斉藤」
「なんでしょうか、お嬢様」
「私はこのままでいいのかしら？」
「と、いいますと？」
「私は確かに琴吹コーポレーションの社長令嬢だわ。でも、現社長はお父様なのだから、私に任されるのは荷が重い気がするの」

「ですがお嬢様。あなたの予想は今まで外れたことはございません。心配なされなくとも、大丈夫でございます」
「本当にそうかしら…」
「はい」
「そう…（……退屈だわ）」

◇―◇―◇

私は今、商店街にいる。買い物のためではない。喧嘩を売るためだ。ドンッ。私はわざと、不良に肩をぶつける。
「おい、姉ちゃん。謝れよ」
「……」
「謝れっつってんだろ！」
不良は私の胸ぐらをつかむ。しかし私は微動だにしない。鋭い眼光を相手に向ける。そして静かに告げる。
「…ぶつかってきたのはそっちでしょう」
「何ぃ！？　どういう意味だ！」
確かに私はわざとぶつかった。しかし私は『不良』が気に入らない。
「そのまんまの意味ですよ……」
「い…いててて！！」
胸ぐらをつかむその腕を、私はつかんで締め上げる。ミシミシと骨の軋む音がする。とてもその小さな音が出している音だとは思えない。
「まったく…。自分の罪を認めないなんて……」
「う…うるせぇ！」
力いっぱいのパンチのつもりなのだろう。しかし私にそれは当たらない。
「ふぅ…。弱いんですね…」
「やかましい！！」
「当たってませんよ？」

「くそっ！　くそっ！　くそっ！！」
何回振り構えただろうか。すべてのパンチは私にあたっていない。
「野郎…ちょこまかと動きやがって……」
「あなたが遅いんですよ…」
「ぐっ…」
まず1発。命中。
「こんなことでムキになって……」
「ぐあぁ…」
2発目。命中。
「……恥ずかしくないんですかねぇ…」
掃除、完了。キャップを深くかぶり直し、大きなため息を一つつく。
「ま…待て……」
「…まだ何か？」
「お前…七賢人か？」
「……私は名乗る主義ではないのですが」
「ち、違うのか…？」
「…汚物の清掃人……と言った所でしょうか」
「お前、やっぱり…」
「えぇ…」
「七賢人の1人ですよ？」ニヤ

#2　「過去の大事件」

七賢人。それは、この桜ヶ丘の中枢部を形作る隠れた者たち。
眠れる二頭獅子（ケンタウロス）、ファイバースパイ、惑いの青蝶（モルフォン）、企業の統率者、汚物の清掃人、そして、黄眼の忍び屋。
この七賢人たちが起したとされる伝説の一夜は、いまだに忘れられることはないだろう。そう、あの土曜日の夜の祭りのことは――。

土曜日（サタデーナイトフィーバー）の夜の祭り――――。
その名のとおり、事件が起きたのは土曜日の夜だった。
裏社会のドンと言われた平沢組は、概ね法律に触れてしまう方法で活動資金は得ていない。七賢人の１人である企業の統率者…もとい琴吹　紬嬢の手助けの下、（株）Ｈｉｒａｓａｗａ　Ｓｙｓｔｅｍ　Ｃｏｍｐａｎｙ、略してＨ．Ｓ．Ｃ．を立ち上げ、ＩＴ関係の会社を成長させてきた。会社を続けるにあたっては、ほかの会社の新製品や優品を仕入れなければならないのだが、Ｈ．Ｓ．Ｃ．は琴吹コーポレーションの管轄。製品を導入するかどうかは、紬嬢の判断に任せてあったのだ。
そしてある時、紬嬢はとある製品の導入を拒否。それはＨ．Ｓ．Ｃ．にとっては利益であった。しかし製品を作った側からすれば、それは害悪でしかなかったのだ。さらにその製品を作った子会社は、平沢組に唯一反発するヤクザ、山中組の傘下であり、山中組の管轄だったのである。
会社の恨みを買った琴吹コーポレーションは、対策のために警備を強化。しかし、連絡を受けたのであろう山中組は琴吹コーポレーションを襲撃。その噂を聞きつけた平沢組は、恩人である琴吹コーポレーションを助けるために動いた。その際最も異を放っていたのは、平沢組の末子であり、眠れる二頭獅子（ケンタウロス）である平沢　唯とその妹、

憂であった。
「オヤジさん、狙うところ間違えてない？」
「そうかい？　こちとら借金を抱えちまったんだ。これくらいの損害は覚悟してもらわないとな」
「損害？　覚悟？　…笑わせるねぇ」
「この琴吹コーポレーションの敷地は、恩人といえど平沢組のシマ…。何人の領地に土足で踏み上がってんの？」
「そうですよ。玄関を上がるときには靴を脱ぐ。これは日本の常識です。それでも泥を塗ろうというなら、私たちが黙っていない……」
「へっ！　二頭獅子かなんだか知らねぇが、ワシは負けんぞ！！野郎ども！　行けぇぇ！！！」
その後ろに控えた、１００を超える山中組の舎弟を、頭は躊躇なく二頭獅子にぶつけた。しかしその大量の人数を相手から向けれても、2頭の獅子はびくともしなかった。
　大量の獲物を前に、次々とその獲物を仕留めていく2頭の獅子。仕留められた獲物は、そこらじゅうに積み重なっている。そのうち、紬嬢を狙うモノがいた。
「その首もらったぁぁ！！」
「お嬢様！　お下がりください！！」
「斉藤！！！」
その男がもっていた太刀が、紬嬢の執事、もとい斉藤の頭上に、刃物が振りかざされた。
「斉藤――！！」
紬の顔に絶望の色が見えたその時だった。何者かによって、その怪しい光を放つ腕が止まった。
「！！」
紬はたいそう驚き、その腕から伸びるもう一つの腕を目で追った。
「紬お嬢の身内に手を出そうなんざ……」
そこには唯がいた。しかし。
「大した頭してるねぇ…！！」

その顔は獅子そのものであった。まさに今獲物を捉えんとする、眼光の鋭いライオン。
「さぁ、早く逃げて！！」
「で、でも！！」
「いいから！　ここは私たちに任せて…！！」
「末子殿の言うとおりでございます！　お嬢様、お早く！」
「…分かったわ！　いそいで車を回すのよ！！」
「御意…！」
紬が斎藤に抱えられて車に逃げる間も、あの二頭獅子は容赦なく獲物を噛み切っていた。そう、その姿はまるで、獲物を捉えた百獣の王そのもの。
「斉藤…」
「はっ…」
「今私が見てるのは、錯覚かしら…」
「いえ。私もこの目でしかと、見届けております」
「あなたにも見えるのね……？」
「はい。私にもしっかり見えております。眠れる二頭獅子が――」

資料によって残っているのはこの部分のみで、他のファイバースパイや惑いの青蝶、汚物の清掃人、黄眼の忍び屋がどのように関与し、どのように暗躍していたのかは定かではない。ただ、七賢人全体が引き起こした事件という記述のみが残っており、これはいうなれば『桜が丘闇の伝説』なのであった。

#3　「信頼するところ」

祭りがあった当時から、唯と憂はとある情報屋を行きつけとして利用していた。その名も『Ｎ．Ｍ．　Ｆａｒｍ』。様々な資料が棚に整頓されており、社員は社長が信じる１人のみ。
「またいらしたんですか、末子殿」
鈴木　純である。
「私たちが一番信じてる情報屋だからね」
「それはそれは。嬉しいですね」
そう言って純は、コーヒーを差し出した。唯や憂が最も信用している、情報の多さと正確さが売りのスパイ。スパイとは言っても、人を殺すわけではない。
　この会社の所有者は、情報を集めるだけ集め、その情報を利用して七賢人までも手のひらで踊らすほどの悪徳……いや、利己的な人物。
「…って紹介したらよかったかな？」
なんとも言えない絶妙な笑顔をこちらにむける唯。何を企んでるのか一向にわからない。
「――和ちゃん」
その柔らかな声に、一瞬蕩けそうになるも、なんとか持ちこたえる。
「別に手のひらで躍らせてるわけじゃないわよ。ただ、コマの動きを観察しているだけ…」
その言葉を聞いてもなお、唯はただただ笑顔でいるばかりだ。
「それはそうと、例の情報は？」
「例…？　あぁ、七賢人ね」
「うん。存在は知ってたけど、詳しいところまではわからないんだよ」
「七賢人って言うからには、７人いるんですか？」
「そうよ。詳しくはこの書類を見て頂戴」

和はそう言うと、机上に資料を並べた。
「これは…」
「そう。七賢人をまとめてみたわ。祭りの直後から、七賢人の存在が顕著になってきたから、調べることに関してはそこまで苦労しなかったわ」
といって差し出す大量の資料。さすがは和といったところである。
「まずは貴方たち。眠れる二頭獅子よ。裏社会…もとい族社会のドンと言われる平沢組の末子。これで2人ね」
「あとの5人は？」
「3人目は、ファイバースパイよ」
「ファイバースパイ？」
「インターネットの情報網を利用して、世間の情報を集めるの。インターネットのみならず、身近な情報もチャットで交換できるようになっているわ。文明の力を利用した情報収集ゆえの正確さは、常軌を逸するものがあるわね。ま、私の情報はすべて独自のものだけどね」
その独自の情報でこの正確さ。それゆえに唯たちはこのN・M・Farmを利用している。
「そして4人目は、惑いの青蝶」
「おぉ…なんかかっこいい」
「中学校卒業と同時に、関東全域を統一した伝説のレディース、『恩那組』の総長よ」
「『恩那組』…？　あぁ、あの子ね」
唯が軽く含み笑いをしながら言う。
「お姉ちゃん、知ってるの？」
「うん、まぁね…」
「5人目は、企業の統率者。これはあなたたちも知っているでしょう？」
「うん、ムギちゃんだよね？」
「そうよ。そして6人目は、汚物の清掃人。不良を見つけ次第、有

無を言わさず暴力で撃退する七賢人の1人。そして最後の7人目は、黄眼の忍び屋…」
急に和の顔が曇る。
「これについては、まだ残念ながら分からないの」
「どうして？」
「忍び屋というだけあって、分かっていることが少なすぎるのよ」
「ふ～ん……」
「でも、その七賢人がなぜ…？」
「それはね――」
コーヒーをすすったあと、和ちゃんは静かに口を開いた。
「これが関係していたのよ」
そうやって指を指したのは、企業の統率者を示すチェスのクイーンの白駒。
「ムギちゃん？」
「紬さんが、どうかしたんですか？」
「ムギは他会社の製品の採用を断ったの。でもその製品を作ったのは、山中組の子会社だったわけ。琴吹コーポレーションを逆恨みして、貴社を襲撃。そこから祭りにつながったのよ」
「なるほどねぇ…。で、七賢人が誰なのかはまだわかってないの？」
「残念ながら、埋まっているのは眠れる二頭獅子と企業の統率者だけよ」
「私たちと、紬さん……ってことですよね？」
「えぇ」
「もっとも、貴方たちは祭りに関わっていたし、ムギもその1人だから…。あとの枠が誰を占めるのかは、まだ分かってないわ」
「そっかぁ…。でも、貴重な情報ありがとね。今回はいくら？　その情報」
「お代はいいわ。私が興味本位で調べたことを言っただけだし」
「そっか…。ありがとね」
唯はとびきりの笑顔を振りまき、Ｎ．Ｍ．　Ｆａｒｍを後にした。

「よかったんですか？」
「何が？」
「あんな貴重な情報漏らしちゃって」
「唯と憂は仮にも裏社会のドンよ。こんな滅多に手に入らない情報を提供しなかったら、今度は私が食い殺されちゃうわ」
「なるほど…」
純は和が飲み終えたコーヒーカップを下げると、軽食に、とパンケーキを差し出した。純はコーヒーカップを片付けに、ダイニングキッチンへ向かった。
「本当に純ちゃんはいろいろやってくれるわね」
「私の忠実な駒……」

#4　「アミックの力、紬の心配」

あの夜の出来事は、秋山　澪が運営する『アミック』にも話題として取り上げられた。

［眠れる二頭獅子現る！　今世紀最大の祭りか？！］

こう題された記事には、それはもう大量の書き込みやコメントが寄せられた。もっとやれとはやし立てるもの、その争いを嘲笑うもの、そしてその争い自体の存在を認めないもの…。しかしそういった書き込みの中で、ひときわ目だったコメントがあった。秋山　澪本人も、そのコメントに目を向けなかったわけではなかった。

［七賢人が動き出したか……］

七賢人…。祭りが起こる前からはやし立てられていた、桜ヶ丘の秩序を守る存在。表世界であっても裏世界であっても、桜ヶ丘の秩序を守るという意味ではどちらも同じ。

少なくとも、私が属しているのは表世界の方である。だが、七賢人の詳しい内容までは把握していなかった。把握しているのは、私が七賢人の1人であり、その中でも唯一のネットスパイであるということ。

そう、その名も『ファイバースパイ』。しかしコメントや書き込みを見ていくうちに、その詳しい七賢人の情報を手に得ることができた。

まず、眠れる二頭獅子。敵に立ち向かう姿は、獅子の姿そのもの。2人でいつも一緒に行動し、狙った獲物は決して逃がさず、捉えたあとはハイエナよりもしつこく骨をしゃぶる。いわば、狙われたら

終わり、というやつだ。裏世界、族世界、そして任侠世界のドン。
そして、惑いの青蝶。中学1年の時に、レディース『恩那組』の総長に就任。中学3年で卒業するまでの2年間で、関東全域をまとめ上げたという伝説のレディース総長。その華麗な戦いの数々は、その名のとおり、敵を惑わす可憐な蝶を思い浮かばらせるとか。
つぎに企業の統率者。マネージャーと言うだけあって、ここ日本国内だけにはとどまらず、世界の3／4を掌握する琴吹コーポレーションの社長令嬢。その鋭い勘と実力で、様々な子会社を成功に導いてきた。眠れる二頭獅子が裏世界のドンなら、企業の統率者は表世界のドンだ。
そして、汚物の清掃人。その名のとおり、世の中にはびこる『汚物』を掃除する者。その発勁を使った巧みな武術は、八極拳と酔拳を組み合わせた独特のもの。
最後に、黄眼の忍び屋。七賢人のなかで最も情報が少なく、存在自体も危ぶまれている。聞いたところによれば、敵の知らぬところで情報を集め、それを武器に敵を貶めるということをするらしい。まるで忍者だ。

最近、七賢人がまた静かに動き始めたようである、というような記事の更新を目にしたが、私は関心を持たなかった。七間人に興味え思っていたことは事実だし、関心をもっていたことも事実。けれどもこんな情報を手に入れたところで有用性があるとも思えないし、私の期待するようなことにはならないと思っていた。つまり、私に得なことは何もない。そう。なにも――――。

◇―◇―◇

先ほど紬は、斎藤から冷や汗のでる噂をきいた。

［先ほど断った製品を作った会社の親が、山中組である］

私の頭の中に、嫌な記憶が蘇る。そう、あの夜の記憶。あの祭りの記憶――。

あの日も私は会議を控えていた。○△社の開発した新商品を、琴吹コーポレーションに採用して欲しいということだった。しかし何のメリットも思い浮かばなかったし、琴吹コーポレーションにはなんの利益も無いという考えの下、採用を断固拒否した。

その後しばらくして、琴吹コーポレーションの子会社であるＨｉｒａｓａｗａ　Ｓｙｓｔｅｍ　Ｃｏｍｐａｎｙから、紬が狙われているので、警備を強化して欲しいと連絡が入った。紬は意味が分からなかった。なぜ私が狙われているのか、誰が狙っているのか、そして、琴吹コーポレーションの警備を強化する理由とは…。

しかししばらくしても琴吹コーポレーションには襲撃がないため、紬は敷地内の警備を通常に戻した。すると、それを待ってましたと言わんばかりにある土曜日の夜、山中組は琴吹コーポレーションを襲撃した。この旨を平沢組に伝えたところ、いくら大会社でもこちらの許可なく警備を緩めたことについて叱責、しかしまたその一方で助太刀する旨を明かした。結局平沢組の介入で事件は解決したものの、あまりにも大きい出来事だったためマスメディアには最高の餌となった。

幸い平沢組は、表世界でも好印象であり庶民的であることから琴吹コーポレーションへのお咎めはなかったが、山中組へのバッシングは強まるばかりでその後山中組は活動を停止していたのだ。

しかしその山中組が活動を再開したというのを、先程の斎藤の発言と同時に聞かされた。今のところ平沢組からはなんの連絡もないが、斎藤の独断で琴吹コーポレーションの警備を強化することを決定、敷地内の全アーケードを閉鎖し、外界との接触はもちろんマスメディアとの接触も避けるようだ。また同様のお祭り騒ぎになって

しまうのか。そう考えると悪寒を走らせずにはいられなかった。

#5　「黄眼の忍び屋とは」

「――ということだ。本日の総会はこれまで！　解散！！」
「うっす！！」
わらわらと、境内に集合していた恩那組の輩が散り散りになる。すると、
「やってるねぇ、青蝶さん」
と、どこからか柔らかな声がする。律は警戒し、姿勢を構えた。だが、そう言って顔を出したのは敵ではなかった。
「唯…！」
「お姉ちゃんだけじゃありませんよ」
「憂ちゃんまで！」
七賢人の1人、いや、2人である眠れる二頭獅子、平沢姉妹であった。
「え？　惑いの青蝶って律さんのことだったの？」
「そうだよ。りっちゃんが総長になるって言い出す前に、喧嘩を教えたんだ」
「そうだったんだぁ…」
憂は思わず唯を尊敬の目で見た。唯をはなから尊敬していないのではない。喧嘩の実力は確かだし、憂とまともに対峙（たいじ）すれば圧倒されるほどのオーラと力をもっているからだ。ただ、唯は教えることがあまりうまくはなかったのだ。その唯が律に喧嘩を教えていたとなると、尊敬の目で見ることしかできない。
「……どうしたんだよ」
律は、憂から唯に視線を移す。
「七賢人が動き始めたっていう情報を手に入れてね。ちょっと見回ってるんだよ」
「お前も七賢人のうちの1人だろ？　人のこと言えるのか？」
「あれ、りっちゃん知ってたの？」

「知ってるも何も、祭りの関係者だろ」
「ありゃ、バレてたか」
唯は頭をポリポリとかいた。
「バレない方がおかしいよ。あれだけの騒動起こしといて」
「それもそうだね」
含み笑いをする唯。その表情が学校にいるときの唯と違って大人っぽく見え、柄にもなく律は唯に惚れてしまいそうだった。
「で、今回は何の用だよ。二頭獅子さん」
「大したことじゃないんだけど、さっきも言ったように七賢人が動き出してるんだよ。私たちも今七賢人が誰かを突き止めてる途中なんだけどね、全然わからないんだ。りっちゃん、何か知ってる？」
「…残念ながら私も良くわからないんだよ」
そう言って少し間を置いたあと、律が唯の耳元で続ける。
「最近うちの下のもんが次々やられててな」
「下？」
「あぁ。うちは階級制になってて、上から総長・副総長・幹部・幹事・舎弟頭・舎弟ってなってるんだ。まぁうちの組の場合、副総長2人、幹部5人、幹事15人、舎弟頭3人というなんだが、このうち幹部までが中枢部といって、恩那組の核だ。最近は舎弟頭を含む舎弟たちが次々やられててな。こっちも困ってるんだよ……」
「誰がそんなことやってるの？」
「それが見当がつかないんだ……ただ」
「ただ？」
「うちの舎弟が聞いたそうだ。その名を」
「何とおっしゃってたんですか？」
「『我は黄眼の忍び屋也。直ちに恩那組を解散せよ』とだけ……」
「！！」
唯と憂は顔を見合わせ、ハッとした表情をした。
「黄眼の忍び屋って…」
「そう、紛れもない七賢人のひとりだ。だが顔もわからないし、う

ちのものに手を出す理由もわからない」
「どうして？　手を出す理由がわからないのは見当つくけど、顔くらいは見れるでしょ？」
唯の疑問は最もだ。一方的にやられている以上、手を出す理由が恩那組には見当もつかない。ただ、顔は夜でもない限り見られたはずである。
「それが、仮面というか、覆面をしててだな…。あんまりわからないんだよ」
「りっちゃんの考える、恩那組が襲われる理由は？」
「それもわからない。私らの情報をどっから得たのかもわからないし、謎が多過ぎるんだ…」
「さすが忍び屋だね」
「それだけじゃない。奴は、ここまでやっておいてまだ忠告だと抜かしてるんだ」
「りっちゃんは、憎い？」
「……何を？」
「黄眼の忍び屋」
「……あぁ、憎い。憎いよ。恩那組はただの不良の集まりじゃない」
静かに答える。その表情はまるで、獲物を仕留める前の虎のようだった。
「不良というレッテルを貼られたがゆえ、行き場所をなくした子猫の家なんだ。そして私が…その猫たちの飼い主なんだ――」
「そっか……憂」
「何？　お姉ちゃん」
「これからやることが決まったよ…。黄眼の忍び屋の正体を暴く」
「暴いて…どうするの？」
「まずは暴くだけだよ。どれだけ足掻いても、相手は私たちと同じ七賢人。下手に手出しは出来ない」
「私も協力する！」

「りっちゃんはいつも通りでいいよ」
「でも！」
「りっちゃんは飼い主なんでしょ？　だったら迷える仔猫ちゃんの世話はちゃんとやらなきゃ」
「でも…でも……」
「大丈夫。私たちに任せて私たちは二頭獅子なんだよ？　狙った獲物は逃がさない…」
そう言った唯の表情を見て、律は背筋を凍らさずには居られなかった。学校で見せるいつもの唯の表情ではなかった上、不敵な笑みを浮かべていたのだ。
「だから……ね？」
「…分かった」
律は静かに引き下がった。
「ふふ…いい子」
そう言うと、唯と憂は静かにその場を去った。律はただただ、その似通った姉妹の背中を見送ることしかできなかった。

＃6　「獅子と青蝶の出会い」（前書き）

この部分は律視点で進んでいます。なので1人称が『私』となっていますが、ご了承ください。

#6　「獅子と青蝶の出会い」

眠れる二頭獅子、もとい平沢姉妹には、数え切れないほどお世話になった。特に姉の平沢　唯は、私の師匠であると言っても過言ではない。

唯と出会ったのは、中学1年生の時だった。私は小さい頃から溌剌とした性格で、友達もすぐできる方だった。しかし一部の人間はそれを良く思わなかったらしく、私のその性格が種となって、悪い影響を与えていたようだった。次第にやかましいとか、煩わしいとか、無神経だとかいう風に言われるようになって、最終的にはそれがいじめという形に表れた。

いじめは最初、ノートを破られるとか、上履きを隠されるとかだった。これは私の中では、いじめではなく『嫌がらせ』であった。だからあまり気にしていなかった。

しかしその“嫌がらせ”は例のごとくエスカレートし、私の精神は極限まで追い込まれた。何件も精神科を回った。そしたら一緒に行動していた澪にもいじめの流れ弾は回り込み、澪の心にも深い傷を負わせてしまった。私は深く悩んだ。澪を守りたい。そんなときに出会ったのが、唯だったのだ。

「どうしたの？　なぜ泣いているの？」

唯とあったとき、私は泣いていた。その日も、いじめられていたから。私は唯に告げた。いじめられているのだ。私のせいで、私の幼馴染もひどい仕打ちを受けている。私はその幼馴染を守りたい。だから、私は強くなりたいのだ、と。すると唯は、一言私にこう告げた。

「じゃぁさ、ケンカ…しよう？」

私は訳が分からなかった。なぜケンカなのか、と。当時の私が思いつくケンカは、口喧嘩とか兄弟喧嘩とかそういう内輪でもめるときの喧嘩かと思っていた。けれども、唯の目はそれどころではなかっ

た。
「殴り合いだよ…？」
唯はそう言った。だが私はますます訳が分からない。私は殴り合いなどやったことがないし、当てる自信はあっても、勝てる自信はなかった。顔立ちはすごく優しくて口調もすごく優しくて、だけど何かしら近づきがたいオーラを放っていた。
「大丈夫。当てないから」
唯は言った。私は渋々、その子に従った。そして静かに、向かい合った。
「……いくよ」
静かな声とともに、唯は目にもとまらぬ速さで私の目の前に拳を突き出した。その拳の早いこと、早いこと。時間が経つごとに目は慣れてきたが、体が慣れない。
優しいことに、唯は本当に1発も拳を私に当てなかった。当てなかったけれど、それはもう俊敏以外の何物でもなく、そしてその時の顔は獲物を捉える肉食動物そのものだった。素早かったのはプロボクサーを超える拳だけでなく、足払い、技のよけ方、足技、全てが俊敏、機敏、そして正確だった。私も頑張って反撃はしてみたけれど、まるで相手にはされなかった。唯は上半身だけで私の渾身の反撃をよけている。いくつか唯を見習って、彼女の真似事はしてみたが、やはりうまくいかない。いつしか私は、唯の足払いによって体が泥だらけになった。けれど、なんだか気持ちよかったのだ。清々しかった。
私はあのあと喧嘩の方法を教わり、ここがみぞおちだとかここが急所だとか、体の使い方とか、とにかくいろいろ教わった。そして週に1回は唯と向かい合うようになった。いつまでたっても私の攻撃は当たらないのに、唯の攻撃は目測ではあるが百発百中なのだ。
でも、唯はそれでも私に拳を当てようとはしなかった。ある時唯は、稽古が終わったあとにふと口を開いた。
「私ね、この拳は戦うために使わないって決めてるの」

「どういうこと？」
私が問うと、唯はその柔らかな笑顔を崩さず、ただ一言、つぶやくように言った。
「私のおじいちゃんね、極道なんだよ」
と。驚いた。こんな可愛い女の子が、ヤクザの娘だなんて。唯は続けた。
「私はいつだって、友達は多かった。けど、この事実を知ったとたん私から離れていくんだよ。りっちゃんも、そうなの？」
そんなことない。そう答えたかった。けれども私は、即答できなかった。
「そんなわけ…ないじゃないか……」
私がそういう反応をしたものだから、唯はより一層表情を和らげた。
「やっぱり、どこへ行っても一緒なんだね。仲が良くてもそれは表面上で、中身はそうでもない。蓋を開けてみたら…ってやつだね」
「ち、違う！」
私は必死に反論した。
「何が？」
「そんなこと言ったら、私が唯に喧嘩を教わってる意味がないじゃないか！　唯のおじいちゃんがヤクザとかで引いてたら、私はもうこの場にいないよ！」
「じゃぁ――――」
唯が少しの間黙る。その場に緊張が走った。
「りっちゃんが喧嘩を教わってる理由って、何？」
それは澪を助けたいからに決まってるだろ！　そう言いたかった。しかし、言えなかったのだ。確かに、私自身も強くなりたい。いじめられないほどに。いじめたやつらに仕返しできるように。もちろん澪だって助けたいけど…。そう考えているうちに、わからなくなってしまった。どうして私は喧嘩を教わっているのか。考えれば考えるほどわからなくなる。そういろいろ考えている時だった。
「ぐっ……は…っ」

唯が私のみぞおちに、1発拳を見舞ったのだ。その拳は、確かに深くまで入った。それははじめての拳だった。唯が私にヒットさせたはじめての拳。とても、重かった。

「そんなこともわからないのに、喧嘩なんてしないでよ。結局は自分のためなんじゃないの？」

そう言う唯の顔に、表情は無かった。

「自分が強くなりたい。仕返ししたい……。そういうのが丸見えなんだよ。でもね、喧嘩っていうのは――」

唯は静かに拳を握った。爪が食い込んで、血が滲んでしまうのではないかというくらい、きつく。

「大切な何かを守るためにあるんだよ。傷つけるためじゃなく」

唯はそう言うと、そのまま私の視界から姿を消した。私はその場でお腹を抱えたまま、号泣した。唯には全てお見通しだったのだ。澪を助けたいというのは口実で、本当は自分が強くなりたかったということが。

けれど私は、それでも澪を助けたかった。辛そうにしている澪を見るのは私が耐え難かったから。もちろん、幼馴染として。

それからまた少し時間が経って私は唯に謝った。唯は私の話をずっと聞いてくれて、私が話し終えたときに唯は、

「――やっと帰ってきたね」

としか言わなかった。当時は意味が分からなかったが、今考えてみればわかる気がする。唯はどこまでも、私たちを見守ってくれていたのだ。

唯のおかげで、今の私はある。唯のおかげで、澪は立ち直れて中学校に復帰した。私はレディース『恩那組』を立ち上げ、澪のように困っている子達を匿った。私はそこの総長となって、その子達の親として、責任をもって子供を育てた。今の結果には、後悔していない。

＃6　「獅子と青蝶の出会い」（後書き）

書き溜めが少なくなってきたので、おそらく半月ほどは書きための期間になると思います。次の更新まで、今しばらくお待ちくださいませ。

#7　「狙う者、狙われる者」

琴吹邸　情報機密機器制御室。
ここには様々な機械が所狭しと並べられている。盗聴器具や盗撮器具、さらには政府管理科が所有するものまでさまざまだ。この部屋に揃う機器の全ては、紬の趣味のためではない。平沢組の末子殿、もとい平沢　唯の依頼を受け、この部屋を使っている。今この部屋にいるのは、唯と憂、そして紬。なぜこんな物騒な部屋にいるのかというと、偵察のためである。そう、山中組の。
斎藤からあの話を聞いて以来、紬の胸騒ぎはいつになっても止んでくれなかった。それならば、こっちから探りを入れて未然に防ごう。そう考えたのだった。

ザー…ジジジ……

しばらくのノイズのあと、山中組の部屋に仕掛けた盗聴器がその場の音を拾う。琴吹家が盗聴器を仕掛けるのは、１＋１の答えを出すよりも簡単だ。そこまでの実力と行動力があるということである。

「ったく琴吹のところのお嬢さんは…」
「仕方ねぇさ。成りあがりのお嬢様はあんなもんでぇ」
「しかし、収入をはばかられたとなりゃぁ、親っさんも黙ってねぇよな」
「おうよ。せっかくの収入源が琴吹にチャラにされたからな」
「それはそうと、琴吹には平沢組が付いてるらしいぜ」
「何？　平沢組？」
「あぁ。サポーターとしてついてるらしい」
「ほう。そういえば、琴吹コーポレーションは平沢組の傘下だったな」

「うむ」
「だったら、収入は平沢組に渡るんじゃないか？」
「まぁそうだ」
「また嵌められたのかよ」
「心配すんな。今回は親っさんも潰しにかかっておられる」
「やっぱり本気なんだろうかな」
「当たりめぇよ！　親っさんがあそこまで揉めてるんだ。じきに行動起こすだろうさ」
「そうか。でもまぁ、おやっさんの考えは間違っちゃいねぇよな」
「うむ。琴吹をやれば、平沢が出てくる。そこでわしらがどちらも沈めたら、ここはヤクザトップじゃ」

「！！」
「！」
「！」
その場の3人が顔を見合わせる。盗聴器はそんなのもかまわず、ずっと音を拾い続ける。

「今までは平沢組にやられっぱなしだったからのう」
「これはカチコミじゃすまんわい」
「親っさんも久しぶりに本気になられた。2大勢力がいつ潰れるか、見ものよのぅ」
「まったくだ。表のドン、琴吹コーポレーションと、裏のドン、平沢組。共倒れが楽しみでならんわい」

わはははと、盗聴器からは高笑いが聞こえる。紬はあからさまに不安と焦燥の表情を浮かべ、汗で滑る指で一生懸命スイッチを切った。
「どうしよう……どうしよう……」
「ムギちゃん…」
「…」

それを見た唯と憂も、不安の色を隠せない。怖がる紬を、唯は黙ってそっとなだめた。憂は口を半開きにしたまま、放心状態で突っ立っているだけだった。
「大丈夫だよ、ムギちゃん。私がなんとかするから」
「唯ちゃん、でも…！」
「大丈夫。もう同じ失敗はしないよ。それに――」
唯はその確かな瞳で、紬をまっすぐ見つめて言う。
「方向性は違うけど、ほかの七賢人たちも動き始めてる」
本当のところ、その方向性というのが全くわからない。黄眼の忍び屋と惑いの青蝶との関係、そしてまだ目立った動きを見せていないファイバースパイと汚物の清掃人。和がどんな根拠で七賢人が動き出している、と言っているのか今の唯と憂には到底理解ができないし、まだ行動に現れていない者たちに対しても動いていると言った。唯の考えたところ、今の時点でやることは、あわせて3つだ。
まず、黄眼の忍び屋の正体を探ること。そして、まだ目立って行動していないファイバースパイと汚物の清掃人についての調査、なおかつ最終的な目標は、我が平沢組の敵であり琴吹コーポレーションを狙っている山中組への注視。特に3つ目についてはいそいで対策せねばならない。琴吹コーポレーションの上に平沢組がついているとはいえ、非合法な商売を嫌う平沢組に対しては、琴吹コーポレーションの倒産は大きな損害となる。
「ムギちゃん。私たちそろそろ行くね」
「え……」
「大丈夫。ムギちゃんには斎藤さんがいるし、まだ山中組は襲ってきそうにないよ。こっちもなるべく早く解決できるように頑張るから、ムギちゃんには一つ、頼まれて欲しいんだ」
「？」
紬は静かに首をかしげた。
「ファイバースパイの身元確認をいそいで」

「ファイバースパイ？」
「七賢人のひとりだよ。大体情報はつかめてるんだけど、管理人がわからないんだ。運営しているサイトに問い合わせても、インターネット特有の匿名性でわからないし、まだ目立った動きを見せてないから不安でね…。私も和ちゃんのところは当たってみるけど……」
そう言うと、唯はしっかりと紬の肩をつかんだ。
「琴吹財閥の情報網を信頼してるんだよ。頼まれてくれる？」
その瞳は確かに決心のあるものだった。これには紬も、頼まれるしかなかった。
「……もちろん」
「ありがとう。私たちの主な担当は黄眼の忍び屋と汚物の清掃人だね」
「…唯ちゃん」
「ん？」
「……気を付けて」
そう言うと、紬は柔らかく微笑んだ。
「…うん！　憂、行くよ」
「はい、お姉ちゃん」
和服美人たちを見送る紬の目に、もう迷いの色はない。
「斉藤！」
「はっ。斉藤ただいまこちらに」
「調べて欲しいことがあるの」
「と、いいますと」
「七賢人のことについてよ」
「しかしお嬢様、そのことについては既に……」
「これは一刻を争うのよ！　私も全面的に協力します。だから早く調べなさい！」
力強くそう言ったあと、紬は優しく続けた。
「お願い斉藤。もう何も、失いたくはないの…」

「……かしこまりました」
斉藤は軽くおじぎをして、部屋を後にした。紬はその時、斎藤が軽く微笑んでいたのを見逃さなかった。

#8　「絡み合う糸」

最近、恩那組に対する嫌がらせが、減っているどころか激増している。その犯人は、既に分かっている。そう、『黄眼の忍び屋』。ことあるごとに妨害を仕掛け、恩那組は少しずつながら解散の危機を迎えている。だが、律はこの組を解散させたくないし、させるつもりもなかった。

正直、今の律にはどうしたらいいかわからない。なぜ攻撃を仕掛けられているのかわからないし、まず黄眼の忍び屋が誰なのかが分かっていない。だから、今私はある御方のもとへ向かっている。律の恩師であり、律の友人。そう、平沢組の末子殿だ。

平沢組、大門。立派な門構えは、そのヤクザの地位を表しているようだった。総長の律でも、これは縮み上がるレベルだ。

「ごめんください」

「へい、ただいま。…どなたでしょう？」

中から1人、男性が顔を出す。

「私、ここの平沢　唯さんの友達で田井中　律っていいます」

「お嬢のご学友で？」

「はい。話したいことがあるんです。唯に…いや、お嬢に会わせてくれませんか？」

「しかしご学友なら、学校でお話されては？」

「それじゃぁダメなんです！」

「しかしあんた、特攻服でそんなこと言われてもねぇ…」

「たしかに私はこんな格好ですが、急ぎの用なんです。お願いします！　お嬢に会わせてください！！」

「しかしなぁ、嬢ちゃん。お嬢にはその手のものは門前払いって言われてるんでな…。すまねぇが帰ってくれ」

「いいや帰らない。私は唯に会うまで帰らない！」

「だがな嬢ちゃん。しょうがねぇだろ、決まりなんだ」
「決まりだろうがなんだろうが、そんなの関係ない！　私は唯に用があってきたんだ。唯に会うまでは絶対に帰らないからな！」
律が玄関先で懇願していた頃、平沢組の第一紫龍（だいいちしりゅう）、唯御座（ゆいござ）では、唯が黄眼の忍び屋について、調査を行なっていた。
「…玄関が騒がしいなぁ……」
「失礼しやす」
障子戸を引き、舎弟が問う。
「どうぞ」
「茶菓子（ちゃがし）等持ってまいりました」
「ありがとう。…ねぇ」
「へぃ」
「玄関先が騒がしいようだけど、どしたの？」
「はぁ…。何か田井中　律っていう女がタカさんともめてるらしいんでい」
「ん？　誰って？」
唯は聞いたことのある名に、思わず聞き返した。タカとは、律相手にもめている男性のことだ。
「田井中　律っす」
「それ本当？」
「へぇ。自分で名乗ってたから間違い無いっす」
「……あの馬鹿」
唯は静かにそう言うと、唯御座を後にした。

再び、平沢組の大門。律はあれから1歩も引くことなく、タカと未だに揉め合っていた。
「いい加減にしろ！　こっちも忙しいんだ！！」
「そんなの知るか！　こっちだって忙しいんだ！！」
「あんたの用事など知らん！　帰ってくれ！！」
ついにタカが業を煮やし、引き戸を締めようとしたその時だった。

「タカ！！」
「……お嬢」
「…唯……」
唯が顔を出した。
「何ギャァギャァ騒いでるんだい」
「へい…。そこの女子(おなご)が、お嬢に会いたがってるんでさぁ…」
「そうかい。よく見りゃそこの女子は見たことある顔じゃないか」
「へい。お嬢のご学友らしいですが……」
「その通りだよ。でもね、タカ」
「へい…」
「そんなに吠えなくとも、私は呼ばれりゃここに出てくるよ」
そう言う唯の表情は、まさに『お嬢』だった。
「……」
「……」
あまりの迫力に、言葉も出ないタカと律。唯はタカに、こっそりと耳打ちした。
「確かに商売敵は追い返せと言ってある。けど友達までは追い返せとは言ってないよ？　ここは『来るもの拒まず、出ていくもの追わず』だ。そうでしょ？」
「すいやせん…」
「謝らないで。私タカのこと信頼してるんだから。もう、裏切らないで」
「……へい」
「ほら、仕事に戻った戻った」
唯は手を2度叩いた。
「りっちゃん、こっちだよ」
「お、おう…」
唯は律を自室へ案内した。
しかしさすが末子殿である。あの一言であの人を黙らせるなど、到底の人間では出来ない。

『そんなに吠えなくとも、私は呼ばれりゃここに出てくるよ』

桜ヶ丘高校に入って、唯と初対面したときは律はとてもびっくりしたけれど、まさか唯があそこまで力があったとは思ってもみなかった。さらに驚きである。

「どうぞ」

「ありがと…」

「ま、楽にしてよ」

「あぁ…」

楽にしてよと言われても、なかなかできるものではない。

「で、どうしたの？」

「……分からないんだ」

「どういうこと？」

「どうしたらいいか…分からないんだ」

「…何があったの？」

唯は静かに問うた。

「あれから勢いは止まることなく、次々に舎弟がやられっちまってる…。ついに薫までやられっちまった」

「楓ちゃんは？」

「あいつはまだ大丈夫だ。…楓のことしってんのか？」

「うん。ずっと見てたからね」

「すごいな、お前」

「それ程でもないよ。仕事だし」

「ふーん……」

しかしいくら仕事とはいえ、律たちに気づかれないうちにメンバーのことを把握するのはとても難しいはずだった。恩那組は桜ヶ丘一帯の不良を下につけているようなものである。その中から幹部数人の名前など割り出すのは、並大抵の人間では無理だ。律は、改めて平沢組の影響力の強さを痛感した。

「で、犯人はわかってるの？」
「あぁ……。黄眼の忍び屋だ」
「またあの人なの？」
「あぁ。今度は忠告だけでなく、こんな紙も残していきやがった」
「どんなの？」
「これだよ」
私は唯に、1枚の紙を差し出した。そこにはハガキの半分くらいのサイズの紙に、大きく『山』という字が印刷されている。山という字は、丸で囲まれている。
「これって……」
唯の表情に、緊張が走る。
「どうした？」
「山中組の家紋だよ」
「山中組？」
「私たち平沢組と唯一対立してるヤクザだよ」
「随分勇敢だな」
「そうでもないよ」
いや、そうだろ。そう言いたい気持ちを抑えて、唯と律の間に置かれた紙を見つめる。
「でも、1つ分かったことがあるよ」
「何が？」
「山中組と黄眼の忍び屋がつるみあってるんだよ。つまり――」
ゴクリ。あまりの緊迫感に、律は生唾を飲んだ。
「山中組と七賢人の1人が、手を組んでるってことだよ」
「……」
「これは厄介なことになったね…」
「平沢組の最大の敵と、恩那組の最大の敵がつるみあってる…か」
思ってもみなかった展開である。
「だいぶ厄介だな」
「りっちゃんはもう七賢人のことは知ってるでしょ？」

「あぁ。眠れる二頭獅子、ファイバースパイ、企業の統率者、汚物の清掃人、黄眼の忍び屋」
「惑いの青蝶もね」
「あ、あぁ…」
「そのうち眠れる二頭獅子は私たち。惑いの青蝶はりっちゃん。そしてあと1人…。企業の統率者」
「…だ、誰なんだ？」
「……ムギちゃんだよ」
「ムギ？！　ムギも七賢人の1人だったのか！」
「そうだよ。ムギちゃんには、ファイバースパイの正体を調べてもらってる」
「そうか…。残りの汚物の清掃人と黄眼の忍び屋はどうするよ」
「黄眼の忍び屋については、私とムギちゃんでどうにかするよ。ムギちゃんの仕事が増えて、申し訳ないけど……」
「残りはどうするんだ？」
「汚物の清掃人は、りっちゃんに任せたい」
「どうするんだよ？」
「挑発だよ」
「挑発？」
「汚物の清掃人がターゲットにするのは、外の世界の不良。つまり成りあがりの不良。だから私たちはターゲットにされにくいけど、りっちゃんたちはされるかもね」
「つまりそれはあたしが囮（おとり）になるってことか？」
「申し訳ないけどそういうことになるね」
「なんか特徴とかないの？」
「黒髪だね。あと長髪。それから赤いキャップを深めにかぶってるって」
「おい、それってもしかして……」
「澪ちゃんじゃないよ」
「！？　なんでわかったんだよ」

「だってそう言う喋り方したから」
「は？」
「長髪、黒髪と来たら、りっちゃんが想像するのはまっ先に澪ちゃんだもんね」
「……」
「でも違うよ」
「…どこが、違うんだ？」
「私たちより背が小さいんだよ」
「……まさか」
「…その可能性は捨てきれないよ」
「だけど…なぁ、有り得ないだろ」
「そう思いたいけど…汚物の清掃人のもう一つの特徴があってね。合気道と八極拳を使うんだよ。そしてそれを取り扱う流派が、ひとつだけあった」
「はは……そんなまさか」
「そのまさかだよ」
「…流派は？」
「――合気八極拳仁王流中野式」
「……嘘だろ？」
「ここから導き出される１つの仮定。それは――」
「梓が、“汚物の清掃人”…」

#9　「解けていく糸」

梓が七賢人の1人、『汚物の清掃人』であるという仮定を立てた唯と律。2人は平沢組の大邸を後にし、そのうち唯は、まずその真偽と黄眼の忍び屋について情報を集めるため、N・M・Farmに向かっていた。

「和ちゃんから預かった情報は、信用度が高い。けれど、一概に信じられるとも限らないんだよね……」

唯があの時口にしていた、黒髪で、赤いキャップを深くかぶり、武術を使う、といった情報は全て、和から仕入れたものであった。情報をどこで手に入れているのかは定かではない。しかし、その正確性と和自身の情報網の広さと収集能力の高さは、唯自身も認めていた。ふと、唯の懐で携帯が震える。

「もしもし？」

『もしもし、唯？　今からこっち来れる？』

和だった。

「今向かってるよ」

『そう、よかった。実はね、あなたに言っておかなければならないことがるの』

「私に言っておかなきゃいけないこと？」

『そうよ』

「急ぎなの？」

『結構ね。だって七賢人についてですもの』

「そうなんだ。私もちょうど七賢人について聞きたいことがあったの」

『ファイバースパイのこと？』

「ううん。そっちはムギちゃんに任せてるよ」

『…じゃぁ汚物の清掃人かしら？』

「黄眼の忍び屋も気にはなってるんだけど……まずはそっちだね」

『そう。よかったわ。私も汚物の清掃人と黄眼の忍び屋について、ちょっと話したかったの』
「そっか。グッドタイミングだね」
『えぇ、ほんとにね。とりあえず急いで頂戴。次の仕事があるの』
「急いでるよ！」
『ふふ…。じゃぁ待ってるわね』
和はそう言い残して電話を切った。唯の表情があからさまに不機嫌になる。
「こっちだって全力疾走で向かってるのに…。和ちゃんは椅子に座ってるくせに…」
そう言って口を尖らす唯。けれども、椅子に座っているからといって、家にいる時間の８割をパソコンの前で過ごすというのは、電磁波の影響もモロに浴びているということも唯は理解していた。唯は全力疾走している足を、さらに速めた。

場所は変わってＮ．Ｍ．Ｆａｒｍ。仕事着、つまり着物のまま全力疾走してきた唯は、汗びっしょりだ。
「大丈夫ですか？　１回着替えます？　それ」
純が水を出しながら問う。
「ううん、大丈夫…」
「とても大丈夫には見えませんが……」
唯の呼吸は乱れに乱れている。それもそのはず、平沢大邸があるのは桜ヶ丘の端で、いつも唯や憂が友人を上げる洋式、３階建ては別荘のようなものであり、実家ではない。ただし、ちゃんと購入している立派な一戸建てだ。和の家とはその別荘から近いというだけであって、実家である平沢大邸からだと結構な距離がある。さらに和の経営するＮ．Ｍ．Ｆａｒｍは貸物件で行なっているため、さらに距離が遠くなる。
「唯はクーラーも苦手だから、使えないわね」
アイスコーヒーを飲みながら、静かに和は言う。

「でも急がせたのは和ちゃんでしょー…」
「そうだけど、まさか実家にいるとは思わなかったわ」
「そんな殺生な……」
唯はソファーに寝転んだ。
「それはそうと、本題に入っていいかしら？」
「どーぞー…」
力のない返事をする唯。和は気にすることなく、資料をもとに話を始めた。
「まず汚物の清掃人についてよ」
「それなんだけど、私とりっちゃんの間ではあずにゃんじゃないかなって」
「その可能性は高いわね」
「うん。…ん？　何で和ちゃんがそんなことを？」
「いろいろ探してたら、興味深い映像が手に入ったのよ」
ほら、と、和はノートパソコンの画面を唯に向けた。寝転がっていた唯も体を起こす。
「これは？」
「桜ヶ丘通りの防犯カメラの映像よ」
「……たまに和ちゃんの情報入手ルートを探りたくなるよ」
「勘弁して頂戴」
桜ヶ丘通りとは、桜ヶ丘で一番の賑わいを誇る商店街だ。その防犯カメラの映像が、和のパソコンから流れている。しかし。
「？！　和ちゃん、ちょっと巻き戻して」
「いいわよ」
和が映像を巻き戻し、再び再生する。
「ストップ！　これって……」
映像がストップする。唯の指さした先は。
「これ…汚物の清掃人だよね？」
「えぇ、そうよ」
キャップを深くかぶり、黒髪で背丈が低め。そしてこちらに向かっ

て歩いてくる様子の、汚物の清掃人であろう人物。防犯カメラの映像のため白黒ではあるが、周りの人間と比べると容姿が違いすぎるので、それは直ぐに分かった。
「この容姿からして、汚物の清掃人が梓ちゃんであることの可能性は高いわ。この間憂にも連絡を入れて、梓ちゃんがこのキャップを持っているかどうか聞いたのだけれど、即答でＹｅｓと帰ってきたわ。リビングに飾ってあったらしいの」
「それは私も見たことありますよ。お父さんのお土産とかなんとか」と純。
「そっか…。汚物の清掃人はあずにゃんなんだね」
「でもまだ決まったことじゃないわ」
そうは言うものの、唯の中の疑問は確信に変わりつつあった。あとは、律の囮作戦の成功を祈るのみ。
「あと、黄眼の忍び屋についてなんだけれど」
そう言って和は数枚の写真を取り出した。
「その姿が山中組の大門（だいもん）前で目撃されているわ」
「やっぱりつるんでたんだね」
「何か分かってたの？」
「恩那組への襲撃の時、紙切れを残していったんだ。それがこれだよ」
唯は紙切れを差し出す。
「これは山中組の家紋。山中組と黄眼の忍び屋がつるんでたのはわかってた。でもこの姿……」
どこかで見たことがある。だが誰なのかが思い出せない。唯はもどかしかった。
「後ろ姿だから誰なのかまでは割り出せなかったわ。ごめんなさい」
「ううん。和ちゃんには感謝してるよ」
「これからは私もアミックを利用して情報を集めるつもりよ。これはただ事ではなくなってきている気がするの」
「私もそう思ってるよ。胸騒ぎがする」

「これからはもっと迅速に、正確な情報が手に入ればいいけど」
「今でも十分正確だよ。じゃぁ私、ムギちゃんのところに行かなくちゃいけないから」
「そう。気を付けてね」
「和ちゃんも」
唯はそう言うと、写真を懐に収めてＮ．Ｍ．Ｆａｒｍを後にした。
「さて、私は次の作業に移るとしますか」
「無理しないでくださいよ、和さん」
「してないわよ。あなたこそ無理しないで頂戴」
「私はあなたのために動くだけですから」
軽くおじぎをして、純はキッチンに向かった。ファイバースパイは紬に任せていると唯が言っていた。ということは、次にしなければならないことは…。
「七賢人の関係……ね」
和はそう呟くと、再びパソコンを開いた。

#10 「青蝶の罠」

私は小学生のときから、祖父に武術を習っていた。それは完全に祖父の趣味であり、私が好んでやっていることではなかった。けれども、両親からもいい運動なると言われていたので、渋々続けていた。その武術こそ、合気八極拳仁王式中野流（あいきはっきょくけんにおうしきなかのりゅう）。合気道と八極拳の発勁を取り入れた独自の流派である。さらにその発勁の一撃を極限にまで威力を高め、世間では『一撃沈』として通っている。

私は師範である祖父から、精神論を叩き込まれることがざらだった。力というのは正義のためにあること、誰かを守るべき時に使うこと、この武術は決して乱用してはならないことなど、いろいろなことを言われてきた。だがそう言われる中で、私は少しずつ願望を持つようになった。

『この力で、みんなを助けたい』

と。今もなお語られる桜ヶ丘の闇の伝説である、土曜日（サタデーナイトフィーバー）の夜の祭りのあと、無防備な“不良”たちが世の中にはびこっていた。それらは後に気に入らぬ誰かをいじめの標的にし、いじりの標的にした。私はそれが許せなかった。人の弱みを握り、それを武器にして自分が相手よりも優位に立っている気になる。祖父から精神論を叩き込まれた私にとって、それはとても許すことのできないことであった。だから私は、汚物の清掃人として世の中に溢れかえる不良共をなぎ倒す活動を始めた。

世の中では眠れる二頭獅子や惑いの青蝶などと並んで七賢人と呼ばれているらしい。私は本当のところ、七賢人というものに興味はない。ただ、七賢人を“潰す”ということに関しては少しではあるが興味があるのであった。もちろん私も七賢人の1人ではあるが、私が得た情報によると、その七賢人のうち、眠れる二頭獅子と黄眼

の忍び屋が『裏の人間』らしい。またその中で眠れる二頭獅子は、本格的な裏の人間、いわゆるヤクザだという。
素人の私がヤクザに手を出すなど、今は言語道断であるし無理に等しい。だから私は、まず最初に惑いの青蝶に目を付けた。話によると、惑いの青蝶は『恩那組』の初代総長であり、また最近は、同じ七賢人である黄眼の忍び屋から不可解な妨害を受けているという話だ。私はこれをうまく利用し、まずは惑いの青蝶から潰すことを考えた。恩那組はレディースであり、紛れもない不良のたまり場。そう、私が大嫌いな、不良のたまり場なのだ。それも『裏の人間』ではないのだから、私にとっては絶好の獲物である。
惑いの青蝶の特徴は、明るい栗色の髪と白い特攻服。そしてその特攻服には、赤い刺繍で恩那組と縫われてあるそうだ。私はキャップを深くかぶり直し、薄笑いを浮かべながら人ごみの中に消えた。

◇　◇　◇

律は今、唯の名を受けて桜ヶ丘大通りに来ている。先ほど唯から連絡があり、和のところに呼び出され、汚物の清掃人と黄眼の忍び屋について情報を得たと言った。当の本人は、今度は紬の家に行くと息を切らして電話を切った。律が今、あえて特攻服を着ているのには訳がある。唯の話では、汚物の清掃人が現れるのは商店街と人気のない路地の2場所であり、狙われるのはグループではなく、単独行動の不良。ゆえに今、律のそばに薫と楓はいない。
「商店街にいるっつっても、この人ごみは……」
溢れかえる人、人、人。恩那組の総長であり、七賢人でもあるから、
「うお！　青蝶だ！」
などと言って避ける奴がたいていだ。けれども、その避ける人数をもってしてもこの商店街の人のごった返しは表情を変えない。
「こんなアリの大群みたいなところから、清掃人を？　仮にも七賢人だ。このなかから見つけるなんて反吐が出るぜ」

頭をポリポリかきながら、律は愚痴る。
「唯は黄眼の忍び屋とファイバースパイを探るって言ってたし…。でもよく考えたら、唯の担当する2人も正体不明なんだよな……」
そう、今律が探している汚物の清掃人もそうだが、唯の探す黄眼の忍び屋とファイバースパイも、正体は不明なのだ。つまり、条件は同じ。むしろ唯の方が、探すのに手間取るはずだ。律と唯、どちらもヒントは得ている。黄眼の忍び屋が、山中組とつるんでいること。そして汚物の清掃人は、キャップを深くかぶり、黒髪、そして律より背が低いこと、また、澪ではないこと。つぎにそいつが武術を使うこと。またの名を合気八極拳仁王流中野式。こう見ると、律のさがす汚物の清掃人は、半ば答えが出てしまっているようなものだ。しかし、実際に見てみないことにはわからない。百聞は一見にしかず、である。
「しゃーねぇ。探すか……」
律は考え直し、止まってしまった足を再び動かす。
「…お？」
と同時に、律の視界に飛び込んだのは、獲物に酷似した人だった。
「キャップをかぶってて、黒髪…」
そして。
「私より、背が低い……」
律は試すことにした。もしそれが汚物の清掃人であるなら、こっちから挑発をかければ、絶対に乗ってくると思ったからだ。
「よーし…。こっちには気づいてないな……」
標的との距離が少しずつ縮まる。５m、３m、２m、１m…。そして。
ドン
ぶつかった。律は静かに口を開く。
「ぶつかったじゃないか。謝れよ」

「……」
標的はその場に佇んだまま、動こうとしない。
「聞こえないのか？　謝れって言ってるんだよ」
律が標的と向かい合わせになろうとした、その瞬間だった。
「…！？」
手首をつかまれた。
「誰に向かって口きいてるんですか？」
冷静沈着な口調。とても七賢人である惑いの青蝶に向けているとは思えない。
「お前こそ誰に向かって口きいてるんだよ」
律はつかまれた手首を、腕を回してつかみ返した。つまり今律がつかんでいるのは、標的の手首。
「！？！？」
あまりに突拍子もないことだったのだろう。今まで目を合わせていなかった標的が、瞬時に律の顔を捉えていた。
「私は惑いの青蝶だぞ？」
標的はしばらく唖然としたあと、思い出したようにつぶやいた。
「律……先輩…？」
その驚いた顔は、まさしく律たちの大事な後輩であり、放課後ティータイムのリズムギター担当である、中野　梓だった。

#11 「紬の覚悟、唯の焦り」

琴吹邸応接室。何十畳あるか分からない広すぎる部屋に、唯は案内された。当の唯はここへ何をしにきたのかというと、ファイバースパイと黄眼の忍び屋の正体を探るべく、紬の家を訪れていたのだった。

「手間をかけて悪いね」

「ううん。他ならない唯ちゃんの頼みだもの。全然大丈夫よ」

そう言って紬は静かに表情を和らげた。

「ありがとう。何かわかった？」

「えぇ。ファイバースパイの身元よ」

紬はにこやかに笑ったままつぶやいた。その表情があるにもかかわらず、部屋に緊張が走る。

「もう…分かったの？」

「えぇ。少々手間取ったけど、そこまで大変じゃなかったわ」

相変わらず、その柔らかな表情は崩さない。全世界がネットワークでつながっている今現在、その膨大な情報量及びコンピュータから、ファイバースパイを割り出すのは容易ではないことは周知の事実だ。だが紬はそれを3日のうちにやってのけた。琴吹コーポレーションの情報網の広さが物を言っている。

「これから調査結果を伝えるわね」

応接室に設置されてあるスクリーンが桜ヶ丘全域の地図を映し出した。

「ファイバースパイが解説したとされるサイト、『アミック』の通信履歴をたどった結果、当然のことながら、アミックの管理人は桜ヶ丘に住んでいることが分かったわ」

「よく分かったね。今じゃ世界中がネットで繋がってるのに」

「そこは私も苦労したのよ。でも最終的には桜ヶ丘にいることが分かったの」

「なぜ？」
「それを今から説明するわ」
紬は唯を諭すように言った。
「さっきも言ったように、アミックの管理人…もといファイバースパイは、桜ヶ丘にいるわ」
「七賢人だからね」
「ええ。そして私たち琴吹コーポレーションは、さらなる絞込みをした」
「どうして？　管理人が桜ヶ丘に住んでいるんだったら、もう確定じゃないの？」
「私もそう思ったわ。でもよく考えてみて。アミックはインターネットのサイトなの。書き込みなどの情報発信源は特定できても、管理人が誰かまではわからないわ」
「そっか…。アミックは相当な会員数を持ってるもんね。それだけでも気が遠くなりそうだよ」
「ええ。アミックの会員は、通信源を探っただけでも桜ヶ丘で3万。結構な数よ」
「そこからどうやってファイバースパイを見つけるの？」
「管理人のページよ」
「管理人のページ？」
「ええ。アミックには2つのページがあるの」
「どんな？」
「管理人がアクセスしてサイトを管理する管理人ページと、アミックの会員が主にアクセスして、掲示板の書き込みやコメント、チャットなどを行うユーザーページよ」
「そこからどうやって絞るの？」
「管理人ページとユーザーページとでは、ＵＲＬが一部、違うことが分かったわ。だから、管理人ページのＵＲＬにアクセスしたコンピュータを割り出したの」
「ＩＰアドレスだね？」

「それとはちょっと違うけど、最終的にはそうなるわね」
ＩＰアドレスとはパソコン個体の認識番号のようなものなので、本来紬が言っているファイバースパイを探し出す方法とは異なる。
「最終的にはってどういうこと？」
「ＵＲＬから特定した結果だけでは、複数のパソコンを使ってそのＵＲＬにアクセスした場合、ファイバースパイが誰なのかは特定できないわ。だから、そのＵＲＬに接続したパソコンを絞り出して、そのパソコンのＩＰアドレスから個人所有かどうかを調べるの」
「へぇ～…。やっぱり大変なんだね」
これを3日でやってのけた琴吹コーポレーションは、やはり敵に回すと怖い。唯はそう確信した。
「その結果、アミックの管理人ページのＵＲＬにアクセスしたパソコンは、合計で５つあったわ。でもそのうち４つは、公共のパソコンだった」
「ネットカフェとかのやつだね」
「ええ。けれどそれに当てはまらなかった１つのパソコンは……」
桜ヶ丘の地図が、ある１点を中心に拡大されていく。
「ここにあったわ」
桜ヶ丘の地図をみるみる拡大させる。そして最終的に写ったのは、普通の一軒家だった。しかし。
「この家、見覚えあるよ…？」
「ええ。多分唯ちゃんの予想通りよ」
「ということは……」
唯はごくりと固唾を飲んだ。
「澪ちゃんが……ファイバースパイ？」
「そういうことになるわね」
唯にとっては予想外のことでしかなかった。七賢人のうち憂を除く律と紬、そして澪がそれぞれ惑いの青蝶、企業の統率者、ファイバースパイだったのだ。ショックは隠しきれない。
「それでね、唯ちゃん」

「…？」
「もうひとつ、言わなきゃいけないことがあるの…」
さっきまで柔らかな表情を守ってきた紬が、ついに険しい表情になる。
「…何？」
それを察した唯も、緊張感をおちおち絶つことはできなくなってしまった。放心状態の唯に対して、紬は諭すように告げた。
「黄眼の忍び屋についてよ」
「黄眼の……忍び屋…」
「ええ。七賢人の中で最も謎が深い人物」
「分かったの？　黄眼の忍び屋が…」
「まだ確信はしてないけれど……。りっちゃんに電話してくれる？」
唯は震える指でダイヤルを押した。数回のコールのあと、律が電話に出た。
『もしもし？　唯か？　どした？』
「もしもし、りっちゃん？　今どこにいる？」
『河原だけど…どうかしたのか？』
「あのね…今からムギちゃんの家に向かって欲しいの」
『ムギの？』
「うん…。あの…話したいことがあるんだって」
『そうか。ちょうど良かった。あたしも話したいことあったんだよ』
「そっか…」
『じゃぁ今から向かうな』
「うん、お願い」
パタンと、唯は携帯を閉じた。
「唯ちゃん、少し落ち着きましょう？　今の唯ちゃんには少し酷かもしれないけど、これが現実なのよ」
「うん…」
唯の目には、うっすらと涙が浮かんでいた。

#１２　「和の真意」（前書き）

思った以上にダラダラな文章となっております。ご了承ください。

#12　「和の真意」

最近、書き込みの内容が「恩那組　ＶＳ　黄眼の忍び屋」というものが多い。それに相まって、いつにも増してメールの件数が増えた。唯に『アミックを使用して情報を集める』と言った以上、実行しないわけにはいかないし、より緻密な情報を集めたかったので、和はアミックに会員登録していた。一般市民から寄せられる情報のサイトというだけあって、裏の情報のみでは見えてこないことも分かってくることが多いようだ。

和は、いきなり掲示板に手を出すのは情報屋として気が引けていた。これは和の決め事であり、情報屋としてのポリシーなのである。和はチャットルームにアクセスした。ユーザーネームは、遊人（ゲーマー）。

――――――――――――――――――――――――――――

チャットルーム

――遊人さんが入室されました

遊人「こんにちは」

紅乃壱（くのいち）「こんにちは」

遊人「あれ、紅乃壱さんだけですか？」

紅乃壱「はい」

遊人「なんか、アミックの書き込みが増えてますね」

紅乃壱「そうですね」

遊人「恩那組ってなんなんですか？」

紅乃壱「６年前にできて以来、力を上げてきたレディースチームですよ」

紅乃壱「できてから2、３年が最盛期でしたね」

紅乃壱「当時中学生、今は高校生の人たちが集まっているグループです」

紅乃壱「上下関係がはっきりしてるけど、仲間意識が高くて仲間のためなら……みたいな感じの」

遊人「正義感があふれてるんですね」

紅乃壱「そうですかね」

遊人「そのチーム、強いんですか？」

紅乃壱「チームとしても強いですけど、総長の強さの伝説はハンパないですよ」

遊人「伝説、ですか？」

紅乃壱「そうです。総長が恩那組を作ってからというものの…」

紅乃壱「あそこのチームの強さは桜ヶ丘でＮｏ．１を誇ります」

紅乃壱「男性のグループを含めても、ダントツですよ」

遊人「そうなんですか」

紅乃壱「どうかされたんですか？　恩那組のこと」

遊人「いえ、アミックに最近それに関しての書き込みが多いじゃないですか」

紅乃壱「そうですね」

遊人「紅乃壱さんは、アミックの会員なんですよね？」

紅乃壱「それはもっと早めに訊くべきだと思いますよ、遊人さん」

遊人「そ、そうですね。すみません」

紅乃壱「いえいえ。チャットルームだけは会員じゃなくても使えますから」

遊人「そうですね…。もう1度聞きます。紅乃壱さんは会員ですか？」

紅乃壱「あなたのご想像にお任せします」

遊人「気まぐれですね…（笑）」

――沖綾真美（おきあやまみ）さんが入室されました

沖綾真美「こんにちは」

遊人「こんにちは」

紅乃壱「なんかお久しぶりです」

遊人「知り合いですか？」

紅乃壱「アミック上での友人ですがね。よく会うんですよ」

沖綾真美「ところで　なにをお話し　されてたんですか？」

紅乃壱「恩那組についてですよ」

沖綾真美「恩那組？」

遊人「そうですよ」

沖綾真美「きいたこと　ありますね」

遊人「沖山さんは、アミックって知ってますか？」

沖綾真美「会員では　ないですけど」

紅乃壱「っていうか、ここですよね」

遊人「まぁ……」

沖綾真美「どうか　されたんですか？」

遊人「アミックで今とても騒がれているんです、恩那組」

沖綾真美「どうして　ですか？」

遊人「総長が動き出したみたいですよ」

沖綾真美「そうちょう？」

遊人「そうです」

遊人「昔ちょっと複雑な事件があって、それから活動を自粛してたんですけど」

遊人「また総長として動き出したらしいですよ」

沖綾真美「そうなんですか」

紅乃壱「それについてですよ」

沖綾真美「そうだったんですか」

沖綾真美「あ、きょうは　これでおちますね」

遊人「おやすみなさい、沖綾真美さん」

紅乃壱「おやすみなさい」

沖綾真美「ありがとう　ございました」

――沖綾真美さんが退室されました

紅乃壱「あの、遊人さん」

遊人「はい？」

紅乃壱「恩那組と黄眼の忍び屋の関係、どう思います？」

遊人「なぜそのようなことを？」

紅乃壱「いえ、些細なことなんですが」

紅乃壱「最近その2組についての記事が頻出してるもので…」

遊人「そうですねぇ……」

遊人「恩那組を嫌う忍び屋が恩那組に目をつけた、というところではないでしょうか」

紅乃壱「でも恩那組は無益な争いはやらないとか…」

遊人「それでもレディースであることに変わりは無い。忍び屋の考え方はそうなのではないでしょうか」

紅乃壱「そうですか…」

遊人「あくまでも、ボクの考えることですよ」

紅乃壱「そうですね…。今日はこれで失礼します。おやすみなさい」

遊人「じゃあボクもこれで。おやすみなさい」

――紅乃壱さんが退室されました
――遊人さんが退室されました
――現在、チャットルームには誰もいません

――――――――――――――――――――――――――――

「案外面白いことを聞いてくるのね……」
あの紅乃壱というユーザーの質問が、和にはとても素人とは思えなかった。過去の大事件について精通する人物、もしくは、七賢人について精通する人物なのか。和はノートパソコンをパタンと閉じる。そして、新たなノートパソコンを開け、たくさんのページを開ける。更にはもう一台、更には携帯電話まで使って、情報を探り始める。
「何やってるんですか、和さん」
純がひょこっと顔を出す。
「ちょっとした調べものよ。すぐ終わるわ」
「コーヒー、入りましたよ」
「ありがとう」
和は椅子をくるりと回し、テーブルと向き合う。
「まったく、あなたの考えていることが未だによく分かりませんよ、和さん」
「ふふ、そうね」
「どうして今回のコトにも、そんなに献身的なんですか？　まだ予防の段階なのに」
「それはね、純ちゃん」
「はい？」
「人間は予想以上のことをしてくる生き物よ？　私が考えていることのようにコトは進まない。だから面白いの」
「はぁ」
「予想外のことをしてくる人間は、私の最高の娯楽の材料なの。だから私は何種類もの駒（ヒト）を一気に紙の上で躍らせるのよ」

「ホントに貴女は遊人ですね」
「そうね」
「そう早々に納得されると困りますけど……」
「純ちゃん」
「はい？」
「私は規則どおりにその場その場で止めたくない。駒を進めるんじゃないわ。躍らせるのよ」
「和さんって、面白い人ですね」
「よく言われるわ」
「そんなあなたが好きだから、私はあなたの秘書をやっているのかもしれません」
純はクスリと含み笑いをした。
「あ、そうだ純ちゃん」
「何ですか？」
「唯とムギと律に、メールで黄眼の忍び屋の調査は少しの間止めてくれるように言ってくれない？」
「どうしてですか？」
「何か面白ことになりそうな気がするの」
「…了解しました」
「本当に最高の秘書ね、あなた」
「…褒め言葉として受け取っておきます」
純は静かに和の部屋を後にした。

#13　「ファイバースパイの思惑」

まったく、パソコンというものは疲れる。情報がいろいろと手に入るから便利ではあるのだが、漢字変換すると時間が相当かかる私は、チャットのほとんどを平仮名で入力しなければならない。後で読み返すと読みにくいこと、読みにくいこと。

やはり律は、総長として未だに恩那組を率いていた。また、遊人は、昔の事件を知っていた。あの事件は、かなり大きな事件ではあったものの、割り合いひっそりと解決されたはずだった。それを知っているというのだから、よほど情報網が広いのであろう。

遊人なんて名乗っているけど、実際どんな人なんだろうか。ただ遊んでいる人とは思えない。東京の渋谷あたりで情報屋でもしているのだろうか。いや、でも渋谷なんかで桜ヶ丘の情報が手に入るのだろうか。…というところを考えると、遊人はやはり桜ヶ丘の人間だという可能性が高い。

紅乃壱も気になるところだ。私よりも恩那組の情報を詳しく知っている。これは使えるかもしれない。紅乃壱と遊人から恩那組の情報を集め、恩那組を壊滅させる。いや、それだけではない。掲示板も使い、アミックの会員たちをうまく煽ることができれば、より恩那組の壊滅は成功に近づく。私は律をあんな場所に閉じ込めた不良共を許さない。

◇―◇―◇

最近アミックには、七賢人に関する記事が泉のように湧き出ている。その中でも特に、恩那組と惑いの青蝶、そして黄眼の忍び屋に関しては記事の更新率とコメント数共々、かなりの速度で更新されていた。そのうちファイバースパイこと秋山　澪が目につけた見出しは、［七賢人撲滅計画について語る］。

今澪が利用しているシステムは少し複雑で、リアルタイムでコメントの更新が見られるだけでなく、ある1ユーザーの提言に対して、会議のような形でチャットコメントが行われる。ほかのユーザーは、その会議チャットに参加することもできるし、閲覧のみすることもできる。どちらの場合も、会議チャットに参加しているユーザーにその名は知られないようになっている。アミックの管理人、澪はそれを知っていた。だからこのシステムを利用しようと考えた。

［七賢人ってどう思うよ？］
［別にいてもいいとは思うけど、青蝶と清掃人は放っておけねぇ］
［よく言った！　恩那組なんか消えてしまえばいい］
［恩那組を敵に回しちゃっていいんですか？］
［おいおい、清掃人を忘れるなよ］
［だいたい、七賢人を消すなんてできるのかよ］
［二頭獅子なんて七賢人最強なんだろ？］
［大丈夫だよ］
［どこに根拠があってそんなこと言ってんだ］
［だってアミックってさ、桜ヶ丘だけでも3万人超えてんだぜ？］
［楽勝だよ］
［あ、確かに］
［そんだけいりゃぁ、中には喧嘩強い奴もいるんでしょ？］
［あ、はい俺ー］
［ふざけんなｗｗ］
［みんな恩那組と清掃人潰すの賛成なの？］
［潰すとしたって、どっちから潰すんだよ］
［恩那組だろ］
［人数いるもんな］
［でもそもそも潰す必要なんてあんの？］
［個人的には、不良はこの世にいないほうがマシだと思う］
［同感］

［俺も思う］
［どうせはクズ］
［フツーの生活できねぇから悪ぶってんだろ］
［桜ヶ丘最強とか言ってっけど、所詮ははクズの集まり］
［1人じゃ戦かえっこないよな］
［だよねー］
［人数的にはアミックのほうが上なわけだし］
［楽勝だよな］
［じゃあ早いうちに叩き潰そうぜ］
［いや、じわじわ時間かけてゆっくり潰すほうが面白いと思う］
［お前最低だなw］
［いや、そのほうがいいかもしれんぞ］
［いきなり行ったら公になっちまって、オレらまで危ないもんな］
［なるほど］
［どんな顔して逃げ回るか見てみたいな］
［さあ、みんな協力して恩那組を潰そうじゃないか］
［ちょ、待てよ］
［何だよ］
［恩那組ってかっこよくね？］
［でもどうせはクズの塊だ］
［でも…］
［でもじゃないだろ、そういう考えを持った奴がいるから、桜ヶ丘が不良で溢れかえったんだろ］
［それ思う］
［いい加減やめてほしい］
［俺らの街を汚すな］
［絶滅すればいいのに］
［だから潰しにいくんだろ、アミックが］
［そうだな］

次々と更新されるコメント。澪も見ているだけではなかった。アミック全体が恩那組撲滅に向かって動き出している。本来なら管理人として止めるべきなのであろうが、澪はそれをしなかった。裏の世界へ行ってしまった唯一身近な存在を連れ戻そうとするあまり、そういう常識的考えが浮かばなかったのだ。

［思ったんだけどさ］
［ん？］
［黄眼の忍び屋がまず恩那組荒らしてるんじゃね？］
［あ、確かに］
［恩那組荒らされ続けてますよね］
［その流れに便乗すれば、本当に消滅させれんじゃない？］
［お前ら、本気であのグループ潰そうとか考えてるわけ？］
［当たり前じゃないか］
［なんでそんなこと］
［お前、今桜ヶ丘がどんなになってるか知ってるのか？］
［不良の溜まり場だよな］
［たまったもんじゃない］
［もうそろそろ団体で押しかけないか？］
［もうちょっと様子見ようぜ］
［もう我慢できねぇよ］
［もうちょっと踏ん張ろうぜ］
［そうだよ。もっと嬲（なぶ）ろうぜ］
［恩那組をキレさせて、潰す］
［目指すはそれだよね］
［目指すんじゃない。現実にするんだ］

その後も延々と書き込みは続いた。澪も同じく、その書き込みを見ながら不敵な笑みを浮かべていた。

#14　「食い止める方法」

「やっと来たわね」
純からのメールを受け取った唯、憂、律、紬と、唯と律の2人が企んだ囮計画にまんまと引っかかった汚物の清掃人こと梓が、N・M・Farmに顔を揃えた。
「なんだよ、黄眼の忍び屋の調査を中止しろなんて」
「そうだよ和ちゃん。私たち、ちょうどムギちゃんから黄眼の忍び屋について、情報提供してもらうところだったのに……」
「それは残念だったわね。…ところで、何かオマケが付いてきてるようだけど」
「梓か？　汚物の清掃人だったよ」
「そう…。やっぱりあなただったのね」
「う……」
梓はばつが悪そうにうつむいた。
「で、和。黄眼の忍び屋の調査を中止しろって、どういう魂胆だ？」
「そうね。説明しましょうか。まずはこれを見て頂戴」
ノートパソコンを差し出す和。面々はそれを取り囲むようにしてのぞく。
「これ、アミックだよね？」
「えぇ。先日、このアミックのとあるシステムで、面白い会話がされていたわ」
カチッと、和はEnterキーを押した。すると刹那、会議チャットのページが開かれた。そこには七賢人を潰す計画が書かれたものがあった。そう、澪が閲覧していた会議を、和もだんまりこくって閲覧していたのだ。
「これ…どういうことですか？」
「そのまんまよ」
「つまり、律さんと梓ちゃんが狙われていると…？」

「まずはそうなるわね」
「でもなんでそんなことするの？　りっちゃんたちは別に何も悪いことしてないよ？」
「アミックのユーザーは、形では七賢人を追い出すという名目で、“正義”の方向で動き出している。でも、私が考えるにはそれは甘い気がするの」
「どういうことですか？」
そう尋ねる梓の表情は真剣そのものだ。
「最も社会に影響を及ぼしている、律と梓ちゃんを消すのよ」
「…どういうこと？」
唯の顔がこわばる。
「あなたたち七賢人は、大きく分けて表の人間と裏の人間に分けられるわ。表が企業の統率者、ファイバースパイ、そして汚物の清掃人。逆に裏の人間は、眠れる二頭獅子、惑いの青蝶、黄眼の忍び屋」
「…その根拠は？」
律が尋ねる。
「まず表と裏の境目だけれど、これは『表立って行動している』ってことよ。世間に何も恥じることがない、胸を張って生きていける人々。ファイバースパイは誰かわかっているのかしら？」
「ええ、分かっているわ」
「私の予想だと、澪の気がするんだけど」
「……その通りよ。どうして分かったの？」
「独自の調査よ」
「…皮肉なものね」
紬の表情が曇る。
「続けていいかしら？」
「ええ…」
「ありがとう。逆に裏の人間は、それを隠すことでやっと世間で生きていける人々。唯と憂はヤクザ、律はレディース、黄眼の忍び屋に至ってはまだ何も分かっていないんだけれど」

「裏と表を分けたところで、奴らになにかメリットはあるのかよ？」
「分けることで、あなたたちを消しやすくなるのよ」
「消しやすくなる…？」
「ええ。ユーザーは裏と表を分類して、自分たちにとって一番邪魔なものから消していこうとしているわ。その結果が律と梓なの」
「なんで…ですか？」
「そこに書かれてあるとおりよ」
律と梓は、同時にパソコン画面を眺めた。

――桜ヶ丘最強と言っても、所詮はクズの集まり
――恩那組をかっこいいと思う奴がいるから、桜ヶ丘が不良で溢れかえったんだ
――俺らの街を汚すな
――目指すんじゃない、現実にするんだ

2人は唖然とした。このあたりで結構なマンモスサイト、アミックのユーザーたちが、七賢人…まずは惑いの青蝶と汚物の清掃人を潰そうと奮起している。しかも1人や2人ではない。それはもうたくさんのユーザーが同盟を組むようにして計画を練っている。律と梓の2人は、淡々と綴られている言葉に唖然とするしかなかった。
「このまま行くと、あなたたち2人、特に律は壊滅的ダメージを受けかねないわ。ただでさえ黄眼の忍び屋から挑発を受けているのに、アミックのユーザーにアタックでもされたら、たまったものじゃないでしょう？」
「……」
「黄眼の忍び屋について、調査を一旦終了しなさいと言ったのはこのためよ。それともう1つ」
和はコーヒーを少し啜った。
「今ここで聞いてしまったから、あなたたちはファイバースパイを澪と特定することができたけど、そのことはまだ澪本人に話しては

ダメよ」
「どうしてですか？」
「アミックのユーザーが独断で動き始めた以上、あなたたち七賢人の手には負えないわ。騒ぎを沈めるには、本人から追い詰める必要がある」
「それって…澪を追い詰めるってことか？」
「そうするしかないわ。だって、アミックの管理人は澪なんだから」
「やめろ…それだけはやめてくれ！」
「だったらどうやって解決するの？　黄眼の忍び屋の挑発でもう恩那組があんなになってるのに、耐えきれる自信が律にはあるのかしら？」
「そ、それは……」
「自信がないのならやめておいたほうがいいわ。自爆して後から悲惨なことになるより、より早急に、そして迅速に安全策をとったほうがマシでしょ？」
「くっ…やむを得ないか……」
律はその場にうなだれた。
「私は澪にそれとなく聞くことから始めるわ。だからあなたたちは、今は静かに待っていて欲しいの」
「でも和ちゃん。そのままだと、りっちゃんの負担が一番大きいよ？」
「そうですね…。律さんは忍び屋から既に被害を受けていますし……」
「いくら元気な律先輩でも、こればかりは不安です…」
周囲に不安が走る。だが和は、そんなことを諸共せずに言った。
「律のことは唯に任せるわ。昔から親交があったみたいだから、何かあったら助けてあげて」
「…分かった」
「梓ちゃんも、当分の間行動は控えなさい」
「はい…」

「私もなるべく早く解決できるように頑張るから、あなたたちも自分に定められたことを頑張って」
そう言うと、和は部屋の奥に姿を消した。純の掛け声により、唯たちは渋々Ｎ．Ｍ．Ｆａｒｍを後にしたのだった。

#15　「居場所の惨状、総長としての誇り」

和の話を聞いてからというもの、恩那組への荒らしは留まるところを知らなかった。その度に薫はグッと歯を噛み締め、楓は不安の表情を浮かべた。そして律は、そんな2人に「大丈夫だ」と声をかけ続けた。そして今日、恩那組の怒りが頂点へと達した。その原因を作り出したのは、目の前に佇む無数の落書きであった。

廃工場はスプレーの色で染められていた。「クズ」をはじめとして、様々な暴言が吐かれてある。その中で、恩那組の怒り、いや、逆鱗に触れたのが、これだった。

【恩那組総長消えろ！　次の総長オレ！？】

そう書かれた板の裏には、律の名前が板に刻まれてあった。

「なんなんだよコレ！」

「意味分かんない！」

「総長のこと……こんなに……」

薫は涙ぐんで言った。

「いいって、こんくらい。気にするな。私は平気だし」

「でも、悔しいですよ」

「いつか収まるよ」

「でも、荒らしが始まって何日経ったと思ってるんですか？　収まるどころか、酷くなってますよ……」

薫の言っていることは事実だ。実際に和から話を聞いて、しばらく経ってから荒らしが始まった。しかし、犯人がわからない。この間までは黄眼の忍び屋は正体を自ら晒してやっていたが、これは陰湿すぎる。それに、律はここを離れるつもりはなかった。子猫たちの居場所を守ると、律は心に決めていたからだ。

「……私がどうにかしなきゃいけないんだ…」

落書きされた板を見つめる。
「総長が気負うことじゃないです…。これは恩那組みんなが抱えるべき問題。私にもやらせてください！」
「そうですよ、姐さん！　あたしらにもやらせてくださいよ！」
必死に頭を下げる2人。しかし律はそれを聞かなかった。
「……バカだな」
「…！」
「私がやらなきゃダメなんだよ、これは」
「でも、でもっ……」
「…総会、始めるぞ」
「…はい……」
始めるぞ、と言った律の顔を、2人は今までに見たことがなかった。長年律の傍にいたあの2人でさえも、初めて見る表情だった。2人は渋々、総会に並んだ。律が高台に立つ。恩那組全員の顔を1人1人見つめ、律は静かに口を開いた。
「みんな、いいか。言っておくけど、私はこれくらいのことで恩那組を解散しようなんて思わない。恩那組はお前らがやっと見つけた居場所だからだ。こんなことに巻き込んでしまったのは悪かった。でも、お前たちのことを仲間だと思ってる。今までも、今も」
そこまで言うと、律は前に向き直した。
「そしてこれからも、ずっとそれは変わることはない」
それは力のある言葉であった。
「それと、私はここの総長だ。それはみんなも知ってる。落書きされて、誇りをズタズタにされてみんな相当頭にきてるみたいだけど、もういい」
律は、落書きされた板を手に持った。そして。
「あ！！」
その板を真っ二つに割った。バキンと音を立てて割れた。刹那、周りがざわざわと揺れる。
「黙れ！」

律はその場を一喝した。
「どんなことがあっても、私は恩那組の総長だ。お前たちが私のことを総長だと認めてくれている限り、そしてお前らの心に私が総長として残り続ける限り、新人の心にもあたしが残り、そして、恩那組の心に残っていく限り……恩那組の総長は田井中　律、私1人だけだ！！」
拍手が沸き上がる。律の顔に迷いは無い。
「姐さん」
「おぅ」
「かっこよかったです」
「そうか？」
「はい。とても、とても……」
薫が微笑む。
「……」
「なんですか？」
「いや、なんでもない」
「……姐さん」
「ん？」
「姐さんは、何でここまでされても拠点を変えようとしないんですか？」
「んー…」
律はしばらく俯いて考えた。
「総長として、守らなきゃいけないんだよ。お前たちがこうやって笑える場所を、安心できる唯一の居場所を、私は守ってやらなきゃいけない。それが総長の仕事だと思ってるから…かな」
「…やっぱり、かっこいいですね、姐さんは」
「そうか？」
「えぇ。私がチームに入ったときと変わらないくらい」
「それは幼すぎるかなー」
「そうでもないですよ」

律は、誰かを守るためには、必死になった。そのときの顔がとてもかっこいい。薫は未だにその顔を忘れられずにいた。

「薫」

「はい」

「暴力はよくないことだ。でも、仲間や家族がやられそうになってるのに、それを見て見ぬ振りして守ろうとしないのは、もっとよくない。それに、恩那組は不良の集まりじゃない」

「…はい」

「私も含め、ここにいるみんなは居場所を失ってきた人たちばかりだ。みんな、自然に違和感なく、そして自分から居場所をなくしてしまった人だろう」

「……」

「私は居場所を提供したい。この人たちとなら一緒に笑える。一緒にいて楽しいと思えるグループを、私は作りたいんだ」

律が言ったとき、薫は泣いていた。どうしてなのか、律にも薫にも分からなかった。けれども、律が発したその言葉は確かに説得力があり、なおかつ優しいものだった。その優しさが、薫の心にしみたのかもしれない。

#１６　「続く被害、募る苛立ち」

「それじゃあ、今日の総会はこれでお開きってことで」
「ありがとうございました！！」
「おう、また明日なー」
散り散りになる仲間を見送る律。
「ふぅ……」
一通り見送ったあと、律は転がったドラム缶の上に腰を下ろした。
「お疲れ様です、姐さん」
そう言って、楓は缶コーヒーを差し出した。隣には薫もいる。
「いや、今日も楽しかったよ」
「姐さんが動き出してからというもの、恩那組の雰囲気がだんだんよくなってきましたよ」
「前よりみんな団結してきてるし」
「新人も頑張ってますしね」
「なんか、やっぱり姐さんの力は偉大だなって思いますね」
「同感。あたしらじゃまとめられないし、今起こってることも沈静化できそうにないもん」
「褒めるのはよせ、照れるだろ。何より私の性に合わない」
「事実ですよ」
「このチームは姐さんが築き上げたもの。最初から組み立ててきた姐さんは、やっぱりうちらとは違ってまとめ方が凄く上手ですよ」
「そうですよ、姐さん。学ぶことばかりです」
「そうか」
ふふ、と含み笑いし、缶コーヒーのタブを開けようとしたその時だった。轟音を立て、３つほどのドラム缶が目の前に転がってきた。
「な、何だ！？」
「う、うぅ…」
闇の中から姿を現したのは、さきほど別れたはずの舎弟だった。そ

してその後からは。
「お前…」
「警告だ。この廃工場から荷物まとめてすぐ出て行け。組織は解散してしまえ」
黄眼の忍び屋がいた。ただし、例のごとく覆面をかぶっていて顔を確認することができない。
「な、何を！」
「勝手なこと言わないでください！」
薫と楓が反論する。しかし黄眼の忍び屋は微動だにしなかった。薫と楓を、容赦なく張り飛ばしたのだ。
「かはっ…」
「っく…」
「お前らがいるせいで、こっちは大迷惑だ。組織は解散し、新しい世界で生きていくべきだ。魂銀の総長も落ちぶれたものだな」
「…！！　そ、総長をバカにしないでください！」
「ならばこれまでの騒ぎは何だ。一体感が全く無い。それに、こんな不良チームはここにいるべきじゃない。そもそも、不良が集まる時点で間違っている。それに最近は、アミックの連中にまで目を付けられているそうじゃないか」
「うっ…それは……」
「でも、不良不良って……」
「お前らみたいな奴らは、集まると目障りなんだ。どうせ、一人で行動もできないくせに……」
「今はそんなことはどうでもいい！　お前は一体誰なんだ！！」
かなりの形相で律が黄眼の忍び屋に迫る。忍び屋はしっかりと律の顔を見たあとにつぶやいた。
「姉ち……チッ…」
しかしそれは、律たちのもとには聞こえていない。
「お前たちも、よく考えることだな」
そう言って黄眼の忍び屋はその場から姿を消した。

「あ、おい、待て！！」
「う…あ…」
「ケホッゲホッ…ゴホッ…」
「だ、大丈夫か？」
「な、なんとか……」
打撃が響いたのか、薫と楓がその場にうずくまる。なんとか持ちこたえているようだ。
「一体何が起こってるんだ…？　いきなり襲われて、殴られて……それに……あいつは一体誰なんだ」
「黄眼の忍び屋ってことはわかってるんですけどね…」
「けど、肝心の正体は……」
「……」
「私らがあいつに喧嘩を売ったわけじゃないのにな」
「手当て…してきます」
「おう」
「黄眼の忍び屋、か…。誰だか知んないけど、いい気になりやがって……」

――――――――――――――――――――――――――――――――

その翌日、律は授業中ずっと苛ついていた。ずっと貧乏ゆすりをしているし、シャーペンの芯も何度も折っていた。唯はそんな律が、気がかりでならなかった。朝もどことなく不機嫌だったし、すごく思いつめたような表情をして、ずっと席に座って伏せていた。
「聞いてるの？　田井中さん？」
「あ、は、はいっ」
「ホームルーム中は姿勢正しててね」
「すんません」
「それじゃあ続き連絡します……」
やっぱり変だ。耐えかねた唯は放課後、律に接近を試みた。

◇　◇　◇

「…ちゃん…っちゃん…りっちゃんってば！」
「！？　お、おぅ、唯。どうした？」
「どうしたじゃないよ、早くりっちゃんケーキ決めて～」
「あ、スマン…」
「なんか今日ずっとそわそわしてたわね。何かあったの？」
「いや、ちょっと考え事してて」
「悩みなら聞くよ？」
「いや、大丈夫」
「1人で抱え込むのはよくないですよ」
「いやだから大丈夫だって」
「……」
「…澪ちゃん？」
「ん？　どうした唯」
「澪ちゃんも元気なくない？」
「そ、そんなことないよ…」
「そうかなぁ」
「唯は人のことを心配しすぎだ」
「う～ん…」
「でもなんか、2人とも疲れてるように見えますけど」
「そんなことないって」
「そうだよ梓。お前は気にしすぎだ」
「そうですか……」
まさか、本当にアミックの人間が恩那組に手をだしていたとは澪も予測していなかった。あの事件があってから恩那組は目立たなくなっていたし、律のことだからその行動も目立っていなかっただろうにと思う。ただ、幼馴染としてはあの中に葬らせておくわけにはいかなかった。恩那組が桜ヶ丘に存在し続ける限り、桜ヶ丘から不良

は消えないんだ。そして律も、黒い世界から抜け出せない。そう思っていた。だから、例え律が総長であったとしても、どうにかして恩那組を潰さなければいけない。澪はそう固く決心した。澪がふと開いたケータイの画面には、

［昨日の夜、魂銀の拠点を荒らしてきましたー♪　あいつらの驚く顔を想像するだけでマジうけるーｗｗ］

という記事が書かれてあった。澪はその画面を消さないまま、静かに携帯電話を閉じた。

#17　「獅子の加護、隠された真実」

何か物音がした気がした。本当に微かな音ではあったが、気になったので廃工場から顔を出した。目線の先に、和服少女の後ろ姿が2つ、ゆっくりと静かに廃工場を立ち去っていく。
「姐さん、どうしました？」
楓が問う。
「あ、いや…。平沢組の末子殿を見たよ」
「え！？」
「大丈夫だよ。私が総長の頃から、あの人たちはよくここを覗きにきてるんだ」
「だ、大丈夫なんすか？」
「だから大丈夫だって」
律は楓を諭したのち、こう続けた。
「なぁ楓。あの人はな。昔、私に喧嘩のやり方を教えてくれた人だよ」
「姐さんに？」
「あぁ。私にだ」
「よく平沢組の末子殿に近づけましたね」
「いや、当時はまだよく知らなかったんだ。まだ中学生だったし、お祖父さんが極道だってことしか聞いてなかったからな」
常識的に考えて、極道の孫が騒ぎを起こしたとなると周りの親御さんたちは黙ってはいない。故に、やられてもやり返すことはできなかったのだ。唯が優しいのは、これも原因のひとつかもしれない。
「それに、近づいてきたのは向こうなんだよ」
「えっ…！」

『ケンカ…しよう？』
『あなたの力は、自分の身を守ることと、仲間を守るために使って』

喧嘩の稽古として会った最後の日、唯はそう言い残した。それに刺激された律は、一般人に危害を加えない、ただ単に女子会みたいな感じのグループを作った。律のように、居場所をなくしてしまった人たちの新たな居場所となるようなグループを作ったつもりだ。

『お母さんが言ってたよ。一年生になって友達百人作れなくてもいいから、百人分大切にできるような本当の友達を作りなさいって』

そう、これもあの日に唯が残した言葉だ。恩那組のメンバーは、決まってこの世に居場所がないと感じ、友達を捜し求めてやって来た奴ばかりだ。だから、特に揉め事も無く、和気藹々とやっていけているのかもしれない。

「平沢組の末子殿はな」

「はい」

「しっかりした考えを持ってる、あたしの心の師匠だよ」

胸を張って、そう答えることができる。

――――――――――――――――――――――――――――――――

チャットルーム

――沖綾真美さんが入室されました

――遊人さんが入室されました

沖綾真美「こんばんは」

遊人「こんばんは」

紅乃壱「こんばんはです」

遊人「仕事が終わったので来ちゃいました☆」

紅乃壱「仕事お疲れ様でした」

沖綾真美「おつかれさまです」

遊人「軽い仕事だったので、早く終わりました」

沖綾真美「しごと　なに　なさってるんですか？」

遊人「それを言ったら楽しくないですよ、沖山さん☆」

紅乃壱「今日はやけに☆が多いですね」

遊人「最近面白いことが多いんです」

紅乃壱「面白いこと、ですか？」

遊人「はい」

遊人「まず、アミック内で恩那組を潰す計画を立てていること、アミックが恩那組に手を出して、その人たちもまた恩那組の消滅を願っていること、それだけではなく、七賢人の消滅を願っていること……」

紅乃壱「本当に多いですね」

遊人「だからつい☆をつけたくなっちゃうんです」

沖綾真美「それは　おもしろいこと　ですか？」

遊人「ボクはたまらなく好きですね、こういう揉め事は」

沖綾真美「かわった　ひと　ですね」

遊人「よく言われます」

紅乃壱「七賢人自体を消そうとしている人がいるのは、初耳ですね」

遊人「ボクも今日初めて聞きました」

沖綾真美「そのはなし　ききたいです」

遊人「沖綾さん、こんな話好きでしたっけ？」

沖綾真美「はい」

遊人「そうですか」

紅乃壱「遊人さん、早くお願いしますよ」

遊人「すみません」

遊人「狩人が不良だけじゃなくて、マナーの悪い一般人も狩っちゃったことが始まりらしいです」

操り人形「マナーの悪い一般人？」

遊人「はい」

遊人「普段は優等生らしいんですけどね」

遊人「商店街ですれ違いざま、肩にあたった清掃人に喧嘩をふっかけたらしくって」

紅乃壱「それは、その人が悪いんじゃないですか？　記事になってませんし」

遊人「それだけ世の関心が薄かったということでしょう」

遊人「でもその一件から、七賢人自体を不良としてみなすようになった」

紅乃壱「それはまた飛躍した妄想ですね」

遊人「ええ。まぁその原因を作ったのは清掃人ですがね」

沖綾真美「でも　まなあは　まもって　ほしいです」

遊人「ですよね」

遊人「その人、頭だけじゃなくってスポーツもできるらしくて」

沖綾真美「すぽーつ　ですか？」

遊人「はい」

遊人「ボクシングがよくできるとか」

紅乃壱「へぇ」

遊人「にもかかわらず、清掃人にはひねり潰されましたが」

紅乃壱「清掃人、強いですね」

遊人「強さの面では桜ヶ丘じゃ有名ですよ。あまり知られていないだけで」

紅乃壱「もしかして遊人さん、七賢人の類の人なんですか？」

遊人「まさかｗｗ」

遊人「ボクは情報収集が趣味な一般人ですよ」

遊人「七賢人ではありません」

沖綾真美「しちけんじん　って　なんですか？」

遊人「桜ヶ丘を支配する、７人の有力者ですよ」

紅乃壱「そのくらい分かります」

紅乃壱「ていうか、沖綾さんもしってるでしょう」

遊人「まぁまぁ」

沖山亜美「こわいです」

遊人「まぁ普段は何もしてこない人たちなんですけどね」

遊人「昼間は普通に。でも夜はどこかでこの街を彷徨っているんです」

紅乃壱「へぇ」

遊人「その人たちにはあだ名があって」

沖山亜美「なんですか？」

遊人「誰かがつけたかわかりませんが」

遊人「眠れる二頭獅子、惑いの青蝶、汚物の清掃人、ファイバースパイ、企業の統率者、黄眼の忍び屋」

紅乃壱「なんか、かっこいい名前が並びますね」

沖綾真美「かっこいぃ」

遊人「その7人のことを纏めて、七賢人って呼ぶんです」

遊人「ではボクは、これで」

――遊人さんが退室されました

――――――――――――――――――――――――――――――――

「ちょっと純ちゃん」

和はキーボードの上から手を除け、純の方に向き直った。

「す、すみません」
「謝らなくていいのよ。今回貴女は何も失敗をしていないわ」
「でも…」
「確かにビックリしたわよ。こんな資料が目の前に置かれたら」
「はい」
「こんなにいい情報を集めてくるとは思わなかったわ」
「ありがとうございます」
「……あいつらは、そういう関係なのね」
「はい」
「どこでこんな情報見つけてきたの？」
「たまたまですよ」
「へぇ……」
「和さんのことだから、てっきりもう調べあげてるんだと思ってましたけどね」
「私だって忙しいのよ。さっきまで別の仕事をしてたの」
「和さんは、相変わらず凄いですね」
「それほどでもないわ」
「やっぱり貴女は面白い人です」
「貴女も結構面白い人だと私は見てるわ」
「ありがとうございます」
「ついに、アミックの下っ端が動き出したわ。悪役、上手く動いて欲しいわね」
「歩が突っ走り始めました、ってところですか？」
「そうね」
「私、これから買い物行ってきます」
「分かったわ」
純は部屋を出た。和はコーヒーをすする。
「もっと、もっと面白くなりなさい…。私は蚊帳の外でいい。蚊帳の中で暴れているのを外で見るだけでいいわ。踊って踊って、暴れて暴れて……自分を見失うその瞬間まで……！！」

コトン、と、黒色のチェス駒を倒す。
「最高のものを見せて。駒は揃ったわ。後は、戦っていくだけ……。ショータイムよ」
和も続けて部屋を出た。倒された駒(キング)が、起こされることはなかった。

#18　「7人じゃなかった」

律は苛立っていた。皆の前では落ち着くように指示をし、その代わり自分のイライラは発散することができない。何故こんなにも苛ついているのか。理由はアミックにあった。アミックの連中が、最近やけに喧嘩をふっかけてくるのだ。アミックユーザーと名乗る奴らが、律たちの知らないところで恩那組の拠点を荒らしてる。徐々に収まってくれるだろうと思っていたのだが、一向に収まりそうにない。

律は決めた。アミックの頭を叩きのめすと。恩那組を守るため、数多くの居場所を失った子猫を守るため、律は決めた。しかし、アミックの頭は幼馴染である澪だ。だが、ミックはネット上での組織だから、頭が頭だと言って出る必要も無い。たとえ頭ではなくても、自分がトップだと名乗ればそれが事実になることだってありえる。律はどうすればいいのかわからなくなっていた。故に、律はそういうのに詳しそうな奴を再び訪ねることにした。

名前は、平沢唯。裏族で有名な平沢組の末子。唯なら、何かアドバイスをくれるかもしれない。律は淡い期待を抱いて、平沢唯の祖父の家へと向かった。

◇　◇　◇

畳の広がる和室と高そうな壺と掛け軸。そこで1人、唯は考え込んでいた。七賢人の関係性がいまいちつかめない。和は調査を取りやめろと言っていたけど、それでいいのだろうかと。どれだけ考えていたのだろうか、来客に気付かなかった

「お嬢、失礼しやす」

「どうぞ」

「田井中様がいらっしゃいました」

「りっちゃんが？　いいよ、通して」
「へい」
タカに促されて入ってきたのは、特攻服姿の律だった。
「どうぞ、入って」
「どうも」
「いいよ、楽な姿勢で」
「うん」
「今日はどうしたの？　この間と違ってすんなり入れてもらえたようだけど」
「…アミックだよ。今はそれで頭が痛い」
「やっぱり。それで最近イライラしてるわけだ」
「なんだ、気づいてたのかよ」
「まあね。で、アミックがどうかしたの？」
「最近こっちの被害がひどくなってきてて、もう頭を潰そうと思うんだ」
「へぇ」
「だから…唯、何か知らないか？」
「その手のことなら、もっと詳しいとこがあるじゃん」
「え！？　ちょっ、唯！」
唯は私の手を引いて、平沢組を出ていった。

場所は桜橋。２人は、今その橋の上に立っている。唯は浴衣、律は特攻服。強烈な２人組だ。
「ごめん、外に出させちゃって」
「いやいや」
「家でこの話をするのはね…」
「…ごめん」
「別にいいよ。それで、用件って何なの？　りっちゃん」
「あぁ……。アミックのこと、なんだけどさ」
「うん」

「アミックが最近、恩那組を荒らしてるんだ」
「知ってる」
「今は落書きやモノを投げ倒す程度で収まってくれてるけど、これからどうなるか分かんない」
「うん」
「あたしは、拠点を変えるつもりはない。恩那組は、子猫の家は、あそこだけだから」
「うん」
「あそこを守るのが、私の……総長の役目だと思ってる」
「うん」
「……けど」
「けど？」
「どうしたらいいか分かんないんだよ」
「どういうこと？」
「アミックはネット上での組織。捕まえようとしても、そこには何万人といる。顔も名前も定かじゃないから、特定のしようがない」
「そうだね」
「けど頭は、澪なんだ」
「うん」
「サイトには私たちを潰すことしか書かれてないし、誰がそそのかしたのか…。皆には、迷惑をかけていないはずなのに」
「澪ちゃんを潰して、どうするの？」
「分からない……」
「……」
「分からないんだ。なぜ私たちが狙われているのか…。いや、狙われるのはいい。だれが潰すと計画したのかが知りたいんだ」
「うん」
「誰だか、わからないか…？」
「さぁ…。その手のものは和ちゃんかムギちゃんに任せてあるし…」
「やっぱりダメか…」

「……いや、ちょっと待って」
「何か心当たりあるのか？」
「紬お嬢……ムギちゃんのとこに行ってみるかな……」
「え、ムギんとこに……？」
「うん。ムギちゃんのとこは情報が速くてね」
「え…。でも、巻き込むのか？」
「既に巻き込まれてるよ、ムギちゃんは」
「そ、そうなのか…？」
「うん。ま、詳しいことは後から話すけどね」
そう言いながら唯が懐から、小さな箱とライターを取り出した。
「ちょっと一服させて」
申し訳なさそうに言いながら唯が手に取ったのは、タバコだった。
「それは、私が見てバラしてもいいってことなのか？」
「うーん、それは困るけど、りっちゃんがバラすって言うなら、しょうがないよね」
それを聞き、律は少し不満そうな顔をした。それは私が、唯がタバコを吸っていることをばらすことができないのを知ってて言っているのかと、そう思った。
「それにもう、学校にはいられない気がするんだ」
唯が何かを言ったが、それは気にしないことにしておく。
「バラさないでおいてやるから、これっきりにしろよ」
「ありがと、りっちゃん」
「約束だからな、これで本当に終わりにしろよ」
「分かったよ。こういう世界にいると、自然にこういったものは手に入っちゃうんだよね」
唯はそう言って、煙草の箱をゴミ箱に投げ捨てた。
「りっちゃん、案外清純派なんだね」
「あ、あたしは不良の溜まり場作ったわけじゃねぇし」
「へぇ」
「あたしは、その…居場所をなくした奴の居場所を作っただけだ」

「かっこいいこと言うね」
「バカ、本心だ。何度も言ってるだろ」
「はは。確かにね」
タバコを吸い終え、火を消したあとに唯はポツリとつぶやいた。
「七賢人ってね、7人じゃないんだって」
「…は？」
「8人らしいよ、本当は」
「どういうことだよ？　八賢人ってこと？」
「そうなってもいいけど、ポジション的には傍観者だから微妙だね」
「…？」
「遊人って言うんだって」
「げ、ゲーマー？」
「そう。その人は遊ぶんだよ。人間でね」
「人間で？」
「うん。実際、私もよく分かんないんだよね」
「……」
「さ、ムギちゃんのとこ行こうか」
「え、今から行って大丈夫なのか？」
「大丈夫だよ。ムギちゃんならまだ起きてるよ」
「マジで？」
今の時間は夜の9時。起きてるであろうが、普通この時間にお邪魔するのは失礼極まりないだろう。
「けど、資料集めとかしないといけないんじゃないのか？」
「大丈夫。前々からアミックについては興味あったし、今回の裏の事件に関することを調べて欲しいって、言ってあるから」
「そうなのか」
「うん。和ちゃんには内緒だけどね」
「なんでお前はそこまで元気かなぁ。浴衣の癖して」
少々苦笑いを浮かべ、律は唯の後についていった。

#19　「待ってられない」

琴吹邸　紬自室バルコニー。紬はあれから和の言うことが納得できず、七賢人、特に黄眼の忍び屋とファイバースパイにおいて調査を続けていた。

「お嬢様、もう遅いですし、お休みになられてはいかがですか？」

「私はいいわ。もう少し、ここにいるから。あなたは先に休んでていいわよ」

「しかしお嬢様、あなたのお体が心配でございます」

「心配は要らないわ。私こそあなたの体が心配よ。お願い、先に休んでて」

「…分かりました。お嬢様も、無理のなさらぬよう」

「大丈夫だから」

「ですがお嬢様……」

「私は大丈夫よ」

「……」

静かな時間がしばし流れた。その後、紬の方に温かみを感じた。

「えっ……？」

「汚い燕尾服で申し訳ございません。しかし、私にはお嬢様のお体がやはり心配です」

「斉藤……」

「あなたは私と違ってまだお若い。ですが琴吹コーポレーションの大切な一員でございます。そのような方を失うのは、私は何より悲しいのでございます」

「ありがとう、斎藤」

「いえ、いつも旦那様にはお世話になっておりますゆえ。あまり遅くならないうちに、お嬢様もお休みくださいませ」

「えぇ…」

「では失礼します」

そう言って、斉藤はバルコニーを後にした。だが、斉藤は真面目だ。きっと外に出るだけ出て、オロオロしているに違いない。分かっていると言ったものの、遅くならないうちに部屋に戻る気など紬にはさらさら無い。戻らないといけないとは思うけれども、1人で考え事をするのに部屋にいては、気が滅入ってしまう。

紬が今考えていることは、七賢人のことだ。最近、一般人の知らない裏の世界で抗争が起きようとしている。それはほかでもない。七賢人によるものだ。しかしそれは、七賢人が好きで動いているわけではない。恐らく、誰かの手によって踊らされている。唯に頼まれていた資料はもう出来上がった。後は、話しながら解決の糸口を探っていくのみだ。まさか、唯以外の七賢人がこんなに近くにいたとは。

◇　◇　◇

「唯、ホントにこっちであってんのか？」
「今日はたぶん家にいると思う」
「おい、私こんな格好なんだけど」
「それは総会の後にすぐ私の家来るからだよ」
「ムギのトコに行くとか聞いてねぇし」
「だって今行く方が手っ取り早いし」
「あ、私外で待ってる」
「えぇ？　大丈夫だよ。この家は、ムギちゃんと使用人さんと斎藤さんしかいないから」
「いや知らんし」
「とにかく、一緒にいれば大丈夫だから」
嫌がる律を引っ張り、唯は琴吹邸のインターホンを押した。
「はい、琴吹ですが」
「あ、平沢唯です。紬お嬢さんいらっしゃいますか？」
「少々お待ちくださいませ」

ブツッと通話が切れ、大きな扉が開く。何回来ても見慣れない光景だ。
「いらっしゃいませ、平沢様」
「そんなに固くしなくていいですよ、斎藤さん」
「私は執事ですゆえ、そのような無礼なことは……」
「固いですね、あなたも」
「少々そこでお座りになってお待ちください。お嬢様にお声をかけてまいります」
「はい」

「お嬢様」
「なぁに、斎藤？」
「お客様が見えておられますが、どうなさいますか？」
「お客様？　誰かしら」
「平沢様と、田井中様でございます。お引取りしていただいたほうがよろしいでしょうか？」
「いいえ、いいわ。通して頂戴」
「はっ」
「後、暖かい紅茶を3つ、持ってきてくれるかしら？」
「かしこまりました」
「それと斎藤」
「はい」
「燕尾服、ありがとう」
「いえ。こんな汚い召し物を、大変失礼いたしました」
「大切なのは心よ。とても暖かかったわ」
「恐れ入ります。では、平沢様をご案内しますゆえ…」
「ええ、そうね」
「失礼いたします」

唯たちは斎藤によって、紬の自室に通された。

「こんばんは」
「…おっす」
「こんばんは」
「どうしたの？　唯ちゃん」
「今日は裏の仕事のお願いでさ」
「ええ」
「この前頼んでた資料だけど、できてるかな？」
「ええ、資料はできてるわ。ここじゃあれだから、会議室を使いましょう」

◇　◇　◇

琴吹邸　情報会議室
「それで、りっちゃんはどうしたの？」
「わ、私は……」
「いやぁ、りっちゃんと会って話してたんだけどさ」
「うん」
「話の中でアミックの話が出てきてね」
「うん」
「私そういうネットワークのことは分かんないから、一緒に情報貰いに来たの」
「そうなの。やっぱりアミックは気になってるのね」
「あぁ。やけに引っかかってくるんだ、アイツら」
「りっちゃんの話では、だれかがそういう事を唆さない限りありえないって言うんだけど…」
「えぇ、私もそう思っていたところよ」
「というと？」
「アミック内での会話の流れに違和感を覚えたの」
紬が言うには、Ｎ．Ｍ．Ｆａｒｍで見せられた会議チャットを、管理人も見れるはずだということだった。しかしその会議チャットの

内容は七賢人の滅亡というもの。それを仮に管理人、つまり澪が見ていたとしたら、それを止めなかった澪も共犯だというのだ。
「つまり、会議チャットの内容を黙認したってこと？」
「そうよ、唯ちゃん。管理人なら、世の中のマズイ流れはサイトの管理人が断ち切るのが普通。でもそれは行われなかった」
「仮に澪がそれを見ていたら、会議チャットの内容、つまり七賢人の滅亡を黙認したってことか…」
「そうなるわね。つまり、澪ちゃんは七賢人の滅亡に賛成ってことよ」
「そ、そんな……」
「アミックは七賢人を狩ろうとしている。重点的にこの街から追い出そうとしてるのは、恩那組と清掃人」
「……」
「アミックで何があったのかは知らない。澪ちゃんが何をしたのかは分からない。けど、これだけは事実なんだよ」
「ここ最近、恩那組のメンバーも襲われてるらしいわね」
「……あぁ。いつもあたしが駆けつける前に逃げていくから、男か女かも分かってなかったんだけど」
「何かあったの？　過去に」
「なんで？」
「だって、澪ちゃんがそんな危ないことするとは思えないよ」
「そうね。怖がりの澪ちゃんだもの。りっちゃんが中学時代、つまり恩那組が発足した当時は、まだ狙われてなかった。データには、あの頃は1回も襲われた記録がないわ」
「あぁ。中学時代は何もなかった。アミックのこともよく知らなかった」
「だと思った。澪ちゃんがこんなことしてるのも、今まで知らなかったんでしょ？」
「あぁ。アイツは、ずっと私が守っていかなきゃいけない存在で、サイト運営ができるほど度胸はないと思ってたから」

「だよね。私もびっくりした」
「でもどうして中学時代は敵視していなかった恩那組を、今になって目をつけたのかしら」
「分かんない。だからりっちゃんに聞いてるんだ。何かあった？」
「……分かんない。大したことはないと思うんだけど……」
「喧嘩とかは？」
「してない」
「じゃあ、なんでだろう」
「もしかしたら…」
「何か思い当たることある？」
「私に足を洗えって言ってるのかも知んない」
「足を洗う？」
「あぁ。レディースなんかから離れて、私に七賢人という名前から退いて欲しいと思ってるのかも知んないな」
「どういうこと？」
「アイツ……澪は、私がこっちの道に進みだしたときに一番反対した奴でな……」
律はそう言うと、祭りの続き…聡が襲われたことについて、ゆっくりと話し始めた。

#20 「幼馴染、そして弟」

「私がどんなに説得しても、澪は納得しなかった。だけど……」
律は昔話を始めた。

◆

『やめなよ、律。そんなの絶対間違ってる』
『……』
『総長なんてやってちゃだめだ。前の律に戻ってよ！』
『……』
『いつも傷作って、平気なのか？』
『平気だよ。傷に関しては、免疫がついたからな』
『……』
『私は普通の世界に戻れない。澪に澪の場所があるように、私にも私の場所がある。それだけの話だ』
『でも律……』
『私はもうここにはいられないんだ。こんな私が嫌なら、身を引いてくれ』
『……』
『じゃあな』
『待て律！』
『なんだ』
『お前はそれでいいのか』
『あん？』
『その道でホントにいいのか？』
『……あぁ。私がこの世界で居場所を見つけるまで、私はこの道を進むしかない。いつかはこっちに帰りたいとは思う。けど、いつになるかは分からない』

『……待ってる』
『ん？』
『帰ってくるんだろ？』
『…絶対帰ってくるとは言ってない』
『帰ってくる可能性があるなら、私は待つよ。お前を待つ。私でよかったら相談にも乗ってやる』
『……サンキューな』

◆

「なんか、いい感じだね」
「あぁ。あの時はあんな感じだったんだけど…」
「じゃぁどうして…」
「……恩那組最大の事件が起きたからだと思う」
「やっぱり……」
「澪はそのときのことも重ねてるんだと思う。あの事件で一層澪の不良嫌いはひどくなった」
「あの事件って？」
「祭りだよ」
「でも、祭りは恩那組関わってないよね」
「…まだ続きがあったんだよ」
「続き？」
「あぁ」
律は少し俯いた。
「…聡が、襲われたんだ」

◆

あの時も律は、総会をやっていた。
「姐さん」

「ん？」
「最近は平和でいいですね」
「そうだな」
「不良も近寄ってこなくなってきたし、暴力沙汰にならなくてホントいいですよ」
「暴力は嫌いっすよ」
「あぁ。平和が一番だよ」
そう話していた時だった。律のケータイが震えた。
「姐さん、携帯鳴ってますよ」
「おぅ…もしもし？」
『もしもぉし？　総長？』
「だ、誰だよお前」
『それを言っちゃぁ面白くねぇ』
「は？　聡じゃねぇのかよ」
『聡？　あぁ、このガキのこと？』
刹那、電話口から力無い姉ちゃんという声が聞こえた。
「聡！？」
「姐さん？」
律の大声に、薫も楓も血相を変える。
『ということで、聡くんは俺が預かっている。返してほしかったらわしらに大人しくボコられろ』
「……どこだよ」
『ぁん？　もっと大きな声で』
「どこに行けばいいんだって訊いてるんだ！」
『ははっ。いよいよ面白くなってきやがった。ここは桜ヶ丘公園の裏だ』
「……」
『分かったらさっさと来い』
捨て台詞を吐き、電話は切れた。
「チッ」

「姐さん…？」
「悪い。私用事できたわ」
「姐さん、何があったんスか？」
「なんでもない。これは、私の問題なんだ。先に、帰っててくれ」
「姐さん！」
「悪い」
そう言って律は走った。聡以外のことは考えられなかった。相手が誰なのかどうでもよかった。聡が無事でさえいてくれれば、いや、聡がこれ以上痛めつけられないことを祈っていた。律を殴って気が済むなら、殴られていいと思った。聡が助かるなら、自分が殴られ続けて死んでしまってもいいと、弟が助かるなら自分の命はくれてやってもいいと、本気で思った。

「はぁ、はぁ、はぁ…」
桜ヶ丘公園、裏空き地。
「大分早かったな。まだ5分も経ってないぞ」
「うるさい……聡を返せ」
「まぁまぁ。そう熱くなるな」
恐面の男性が、律の首根っこをつかむ。
「がっ……」
「姉ちゃん！」
「気持ちいいねぇ。今まで誰にも殴らせなかったのに、このガキ捕らえただけで、こんなにあっさりと殴られるとはな」
「ぐっ……」
「総長伝説も、これで終わりだ」
その瞬間、何発もの拳が律を捕える。
「姉ちゃん！　俺のことなんていいから！　だから、手ぇ出せよ！」
しかしそれでも、律は手を出さなかった。
「姉ちゃん！」
「いいねぇ、姉思いの弟がいてサ」

「黙れ」
「おいおい、そんな目すんなよ。つまんなくなるだろ」
「……」
「あ、そうだ。大事な大事な弟クンを、こうするともっと怒るのかな？」
男が手に取ったのはライター。そのライターからは、火がゆらゆらと蠢いている。静かにそれを、智の目に近づける。
「やめろ……やめろぉぉぉ！！」
「……いい声出すね、総長」
「はぁ…はぁ…」
「ゾクゾクするぜ。これで恩那組も終わりか」
「聡には、手ぇ出すな。あたしを殴って気が済むなら、あたしを殴れ。聡に手ぇ出すな！」
「ふむ……」
「今すぐ聡を解放しろ！！」
「その心意気……いいだろう。放せ」
「うぁ……！」
「聡…！」
「いい女だ。ここで殺すにはもったいない」
「何が…目的なんだ」
「そんなん決まってるだろ」
男は静かに続ける。
「俺らはアンタらが存在することを嫌い続けてる。アンタらが目障りなんだ。何もしてなくても、アンタら不良を見てるだけでイライラする。アンタに消えてほしいと思ってるよ。祭りが起こったのも、てめぇらのせいだしな」
あれから律は殴られ続け、律は、気を失った。次に目を開いたときは、病院のベッドの上だった。あの後、あの男たちが何処の誰だったのかはまだ分からない。だが、聡を律の弟と決め付けていたことから、よほどの情報通だと思われる。聡は、昔から結構人見知りで、

なかなか外で遊ぶということをしなかった。律も、聡が弟であるということは公表していなかった。それを知っていたのだから、裏の人たち、もしくはその頃から情報のやり取りが活発であった、アミック関連かだ。本当のところはわからないが、多分そうであろう。

◆

「桜ヶ丘から不良を消せば、争いも少なくなる。でもそうするためには、この辺で力を持つ七賢人を場外に出さなくちゃいけない」
「だから、恩那組を急に襲い始めたのね」
「だと思う」
「単純に、魂銀が不良として見られ始めた、って考えてみたらどうかな？」
「どういうことだよ」
「だって、清掃人はともかく、恩那組は実質的な被害は出してないんだよ？　なのに祭りに関連してるとかしてないとかじゃないと思うな。だって、祭りの主犯は私とムギちゃん、そして山中組なのに」
「それはそうね……」
確かに、土曜日の夜（サタデーナイトフィーバー）の祭りは主に山中組と琴吹コーポレーションのすれ違いから起こった抗争であって、平沢組はそれを止めに入っただけに過ぎない。それが肥大化しすぎた故に事件となってしまっただけで、恩那組は何の関係もない。
「気になるのは、その祭りの後から恩那組の組織人数が爆発的に増えてることなんだよ」
「そうね、資料からもそれは言えるわ」
「祭りのことを知っている、りっちゃんを含む中枢部分と新人の一部は、裏の危険性を十分わかってる。けど。ただの憧れで加入した奴らは、恩那組として喧嘩をしかける」
「その頃のことはよく知らないけど、楓たちが大変だって言ってた。自分が組織しているのに、知らないなんてのもおかしいけど」

「仕方ないよ、聡君の件もあったんだもん。ただそこで問題になるのは、その奴らが仕掛けた喧嘩を、中枢部分が片付けるような形で終わっていること」
「……」
「そのときみんなは言ったんだよ。恩那組は落ちぶれてしまったってね」
「一般庶民は事情を知らないから、自動的に総長の責任になるわよね」
「それで、チーム全体が悪いと見られるようになったんだよ」
「だから、澪がいきなり恩那組を排除しようとし始めた、ってことか？」
「そういうことになるね」
「澪ちゃんは、りっちゃんを守ろうとしているのかもしれないわ」
「でも本当に、りっちゃんは気をつけておいたほうがいい。荒らしが続いてるのは余兆かもよ」
「それはわかった。あとは黄眼の忍び屋だ」
刹那、沈黙が走る。
「それについては、私が今から説明するわ」
神妙な面持ちで、紬が前に立った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7583x/

Seven Fighters

2011年11月21日05時34分発行